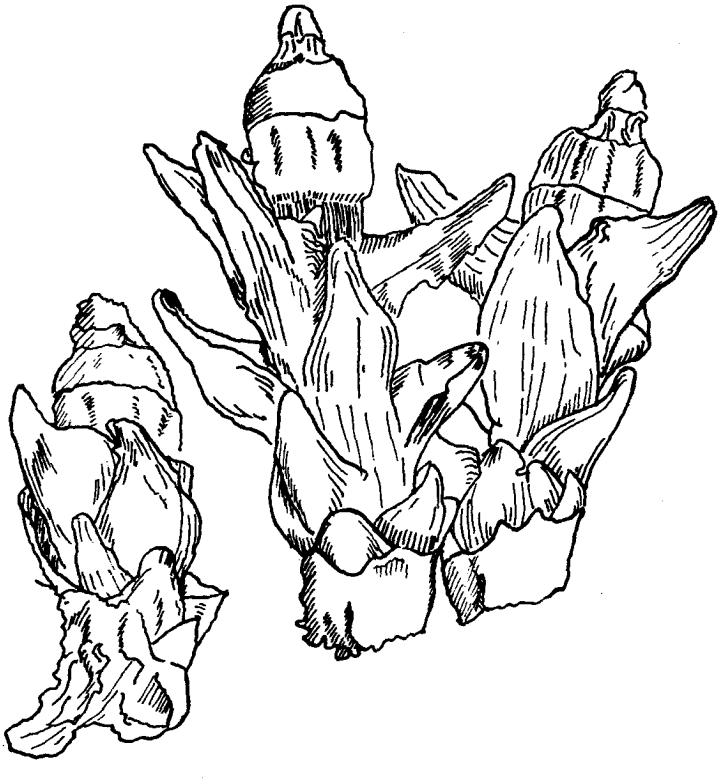
まのせ

第11・12合併号



1975

鹿児島県立加世田高等学校
生　物　部

〔表 紙 説 明〕

ヤッコソウ Mitrastemon yamamotoi Makino
（ラフレシア科）

シイノキに奇生する鳥媒花である。最初四国の高知県で発見された。
四国・九州にまれに産する。全草白色，高さ５～７cm。
葉が鱗片状に退化し，卵形で十字形に数片対生し，１番上の１対を奴（やっこ）のそでに見たて，ヤッコソウと名づけられた。
花は晩秋に花茎の頂に１個上向きに咲く。
図は１１月２９日に黒川隆行君が吹上で採集したものを，前田太君が写生したもの。

① 野間岳キャンプの生物部員（~~P7~~）

② ナシカズラの果実（~~P7~~）

③ 生物部ペットのラット（~~P7~~）

写真説明

① 野間岳キャンプ

黒瀬を過ぎ西へ進み，馬込山までの間の海岸沿いの道で，沖秋目島を背にしての記念撮影。炎天下の強行軍の疲れはてた顔をごらんください。

② ナシカズラ

キウィフルーツ，(チャイニーズグーズベリー)~~ともいう~~というのがある。キウィというのは鳥の名で，この鳥の虐が，ナシカズラの果実の虐に似ているというので，キウィフルーツの名があるという。

原産地は中国南部～西南部で，中国では鬼桃，縄梨，藤梨ともいっている。栽培種はニュージーランドが主産地。生食の他，パイ，ジャム，アイスクリームなどにも用いられる。日本には１９７０年にセイウッドという品種が導入された。

ナシカズラはじつはこの果物の仲間なのである

写真は１９７５年１１月２４日の採集会において，笹連～土卒間で神野君が命がけで採集したものです。分布：本州西南部～沖縄・南鮮の島

③ ラット

名前は朝太郎。生物部の先輩，鮫島輝子さんのお世話で鹿大病院から譲っていただいたものです。卵焼きが大好物で，部員のお弁当の残りを毎日楽しみに（？）待っていたものでした。一時は飼育箱から無断外出して，みんなをハラハラさせたほどのいたずらっ子で，１年余りの間，ペットとしてかわいがられていましたが，老衰で死んでしまいました。今では生物室前のネムノキの下に安らかに眠っています。

目　　次

〔１１号〕

クモの網の張り方 ---------- （１年）中島久之 ---------- 2

採集会

磯間山採集会に参加して ---------- （１年）田代・内田・石堂・馬込 ---------- 4

第２回採集会（金峰山） ---------- 生物部 ---------- 6

野間岳調査会（太郎木場） ---------- 生物部 ---------- 8

昭和４８年度生物日記より ---------- 生物部 ---------- 10

〔１２号〕

ネムノキに来るアゲハチョウ ---------- （１年）東直子・森紀和子 ---------- 12

１９７４年度ネムノキの落花と結実 ---------- （１年）泊美也子・宮下菜穂子 ---------- 16

プラナリアの再生 ---------- （１年）森三千子 ---------- 17

南薩淡水草調査 ---------- （１年）泊美也子・田宮淳子 ---------- 19

薩摩湖水草の分布について ---------- （１年）里園菊代・田宮淳子 ---------- 21

水草（デンジソウ）について ---------- （１年）吉見敦子 ---------- 23

ノビル成長測定 ---------- （１年）姥まり ---------- 25

ラットについて ---------- （２年）西園由加里 ---------- 27

採集会

第１回　蔵多山 ---------- （２年）田代洋子 ---------- 28

第３回　冠岳，仙人岩採集記 ---------- （１年）姥まり ---------- 29

第４回　秋目調査会 ---------- （２年）物袋幸一郎（１年）山口由美子 ---------- 31

第５回　内之浦町辺塚の巻 ---------- （１年）山口由美子 ---------- 34

第６回　大坂コース ---------- （１年）森三千子 ---------- 35

第７回　田ノ頭 ---------- （１年）姥まり ---------- 37

第８回　坊津町，車岳周辺 ---------- （１年）山口由美子 ---------- 38

本校のシンボルあふち（センダン）

の大木にまつわる話題 ---------- （１年）安楽頼子　他 ---------- 39

文化祭展示植物 ---------- （２年）馬入・西園（１年）山口 ---------- 41

平鹿倉植物方言 ---------- （２年）地頭所ちどり ---------- 42

園芸メモ ---------- （１年）竹迫涼一 ---------- 43

昭和４９年度生物部日記より ---------- （１年）竹迫涼一 ---------- 44

屋久島植物方言聞書 ---------- 佐方敏男・山本英司 ---------- 47

生物部員名簿 ---------- 50

クモの網の張り方

1年　中島久之

クモの網と巣。一見同じようで違うのである。普通網とは獲物をとらえるものであり，クモの巣とは生活を営む場所とされている。たとえばジョロウグモ，アシナガグモ，ナガコガネグモなどのように網と巣が一致しているものや，タナグモのようにトンネルを造り，そこを巣として網も巣もあるものなどがある。まずこの観察をしてみようと思ったのは，どのようにしたらあのように美しく，じょうぶな網をはるのか知りたかったからである。またこの観察には文化祭用にと採集したナガコガネグモを用いた。

(a)　網の張り方　（説明図は次ページ）

(1)　木と木の間に一本基本となる糸を張る。

(2)　中央まで戻りそこから下に糸を張りながら降りY字型のようにする。

(3)　再び中央に戻りそこから放射状に糸を張っていく。

(4)　中央部に足場になるものを造る。

(5)　内部から外側に大まかに円形の網を張る。

(1)〜(5)までは粘球はつけてはいない。

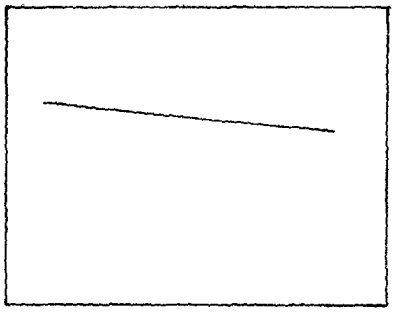
(6)　外側から内側に細かく円形の網をはる。このとき粘球もいっしょにつける。

所用時間３５分

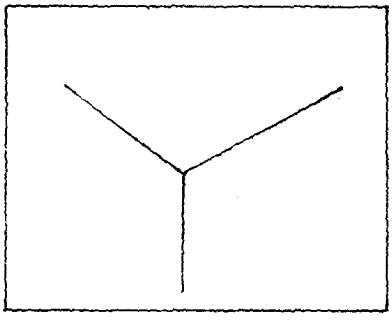
(b)　感　想

この観察を始める以前にクモ班の先輩である市来さんからクモの網は夕方から張るということを聞いていたので夕方の6時から飼育箱とのにらめっこであった。しかし１０時を過ぎても網を張る気配は全然ないのである。こちらも人間いい加減にしてくれという感じであった。結局網を張り始めたのは6時は6時でも朝の6時であった。もしクモの言葉がしゃべれたらばこの時「おまえはきちがいか」といいたいほどであった。しかし，(2)(5)のように網を張る際，じょうぶにするためにいろいろのくふうがされていることがわかった。そしてクモの糸をどうにかして利用することができないものだろうか。

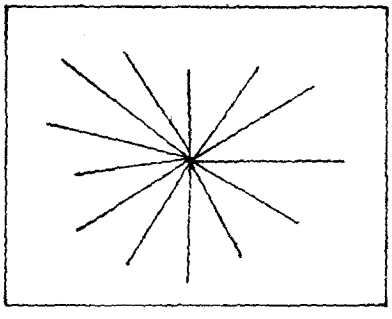
(1)



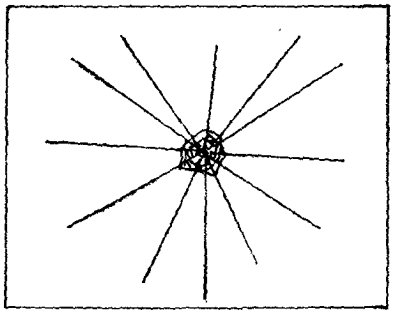
(2)



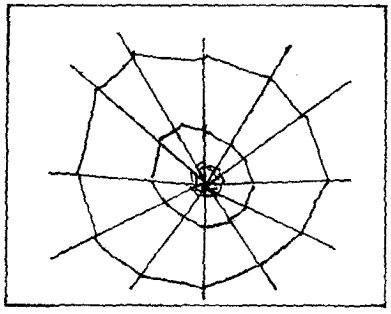
(3)



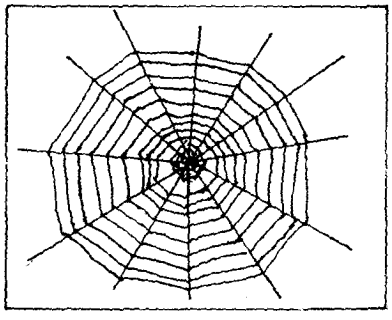
(4)



(5)



(6)



磯間山採集会に参加して

4月29日　日曜日　晴　午前8時に起床する。きょうは，生物部の第1回採集会の行なわれる日である。まだ眠りたいという感情をおさえて無理して起きだす。とにかく，弁当を忘れずに9時前には，上加世田駅につき汽車を待つ。上加世田より長い旅路（？）を終え，上津貫へつく。その時の上津貫もやはり晴れていた。そこよりはるか磯間望見する。

磯間の登り口まで1時間余り。その間にも採集する。これまでよくみかける身じかな草花にも名も知らなかったのが多いのに驚いた。たとえば，ピンクの花をつけた波が立っているように見えるタツナミ草，それから，日陰に生育する赤い花をつけたベニミョウガ。このベニミョウガは後でハナミョウガとわかった。ところで，私は，2年生の親切な先輩からいただいた，かわいい「毛虫」ちゃんを集めることにした。これをみて，『虫めづる姫君』だと，ある先輩が言った。その毛虫のはっていた木は，コクテンギというそうだ。太陽表面の黒点と同じように，葉の表面に，それに似たものがあるのかと思い，一生懸命探してもそれらしいものは見つからなかった。

登り口で，すでに私は空腹感を覚えていたので，早く弁当を開きたい一心で懸命に登った。頂上について，はるかに大浦の部落と海が美しくみえた。私は満足感に浸りながら，空腹感をひたすらにおさえた。せっかく登ったと思ったのにまた歩いた。目的のものはまだかと思うと耐えられないような空腹感に襲われた。これは，生物にとって当然のことで，生物学的にも，人間がいくらぐらいまでの空腹に耐えられるかという研究にもなるであろうと思った。

そして私の目的としたものも終わり，私は周囲の美しい景色をみながらこう思った。『この採集会は，私にとってたいへん意義が大きかった。自然に対する視界も開け，今まで気づかなかったことも注意深く見るようになるだろう。また，少々趣味が悪くなったことは気になるが，部のみなさんの親切が身にしみてうれしかった。』

1年　田代洋子

4月29日　晴天。私たち1年生にとって，初めての採集会であったので，みんなもちろん私も心をうきうきさせて，駅へ向かった。

私たちは，山本先生の車に乗車して上津貫着9時50分。少しおくれてついた汽車からの部員と合流。弁当などをつめた重いリュックは，ジャンケンで負けた部長さんが持つことになった。

さて山に登る途中行く行くいろいろな植物の採集とメモは，私と馬込さんの役。カタバミ，ウマノアシガタ，ソクシンラン，ワラビ，モウセンゴケ，ヒナギキョウなどがある。

磯間山は，アサギマダラというめずらしいチョウもいた。コミスジもひらひらと楽しそうに空中を飛んでいた。全くうらやましい！広い空中世界を美しく旅行できるのが。

下山のときは，いがいに早かった。でもちょっぴりこわかった。だって，すべりそうだったから。帰るときは，冗談ばっかりいってとても楽しかった。

後から考えてみると，私たちが住んでいる自然の中には，私たちが知らないなぞがいっぱいあって，身近なものの名前が私の中に，少しずつうえつけられていくようだ。

1年　内田　よし子

4月29日，私たち一年生にとってはじめての採集会「磯間山」だ。上津貫駅にようやく到着。そこで山本先生の一団と合流。いよいよ登山の準備だ。ドウラン，あみ，みたこともないようなとっても大きなリュック。荷物がいっぱいだ。私たちのナップザックもその大きなリュックにつめこんで，いったいだれが持つのだろう。結局部長さんが持つことになった。とっても重そうだ。帰りはうんと食べて軽くしてあげようなどと言いながら，いよいよ採集が始まる。道ばたにはえている多種多様な草木。どこでも見かけるのに名前は？というとわからない。カラスノエンドウ，カタバミ，聞いたことのある名前だ。人の家の畑にはいってとった植物もある。ヤエムグラ・ギシギシ・ネズミモチ，おもしろい名前を佐方先生はすぐ答えてくださる。途中，食虫植物のモウセンゴケをみつけ実物を見たのは，はじめてだ。こんな小さな植物がどうやって虫を食べるのだろうと不思議に思った。またへびもつかまえた。黒くて長いへびだった。先輩たちの手につかまえられてパチリと写真におさめられる。毛虫の収集も始められ，チョウを追っかけ回す姿もある。ドウランの中もいつの間にかいっぱいになり，肩が痛い。途中での記念撮影も行ないまた長い時間歩いていよいよ目ざす頂上の下まできた。佐方先生は下に残られるとのこと。四時間も歩いたのでつかれてしまわれたのだろう。また元気に登り始める。登山口までの遠い道よりその何十分の一かのこの道がずっと苦しい。息もとぎれとぎれで先生に手をひいてもらいながら，登って行く。もうやめようかと思ったころ，やっと頂上がみえてくる。高い。あたり一面木におおわれ，はるか大浦の家がとても小さく見える。壮大な気分だ。緑の中に新しい芽の黄緑がめだつ。こんな岩上にもコケやランが何種類も生きていた。生物の生命力は，ほんとうに強い。一見弱そうに見える草の精いっぱい生きている姿に感動した。

1年　石堂　律子

上津貫駅を出発，磯間山へと向かう。

山本先生と男子部員は，昆虫類の採集。似たような木々が多くて一度聞いただけでは，なかなか覚えられない。岩石の層のある峠についたのが，11時50分ごろ。層の間に断層があるといっていたが，私には，はっきりわからなかった。ここで記念撮影。登り口から頂上まで，そう距離はなかったけど，岩があったり，急になっていたりして疲れた。木々の間をすりぬけたり，岩によじ登ったり，さるを思いだした。シャリンバイの花と，磯間山にだけあるコゴメイワガサがきれいだった。コゴメイワガサは，花が咲きおわろうとしていたのは残念であった。

下山は登山のときとちがって，すべりそうになるのをとめるのに苦労した。

3時５０分，登り口を出発。帰りは，放牧場の細い道を通って帰った。小牛がつながれていた。キイチゴが実をつけて，とてもおいしそうだった。

上津貫駅について，山本先生と何名かは，先に車で，私たち残りは，５時すぎの汽車で帰った。

1年　馬込一恵

6月２４日（SUN）

―― 第２回採集会（金峰山）――

参加者：２年　鮫島　泉　　市来勝一郎　　牛垣祥成

１年　物袋幸一郎　　中島久之

石堂律子　　内田よし子　　田代洋子　　永田千晴

加世田発８時３０分の大坂経由のバスに乗る，９時２０分に大坂に着いた，すぐ出発した。花が咲いている植物は，キツネガヤ，オカトラノオ，テリハノイバラ，コオニユリ，ノアザミ，ムラサキシキブ，タケニグサ，キランソウ，ヒメジョオン，トウバナ，スイカズラ，ヤブマオ，テイカカズラなどがあった。また，ゴンズイの実が赤くめだってとてもきれいだった。イワガラミ，ソクシンランの花も目についた。

１１時１０分，歩き疲れたので休憩をとった。少ししてから出発。ハナイカダの黒い実が葉の中央についていた。サンゴジュの赤い実や，カキランの花，また，ニオイイバラの小型の花もめずらしかった。アオモジがところどころにみられた。

１１時３０分，再び休憩をとった。

ムラサキニガナの花，ムシトリナデシコの野性化した花が目につく。また，水ぎわにはギンレイカが白い花がつけているのが見られた。ハダカホオズキに似た，イガホオズキの花がめずらしかった。

頂上に着いたのは１２時前だった。１２時すぎに昼食にした。少し休憩して，おしゃべりなどをした後，山頂付近の樹木を調べた。

その主なものは，ヒサカキ（樹高６ｍ），モッコク（５ｍ～６ｍ），マテバシイ（５ｍ），イスノキ（７ｍ）などでたくさん見られた。その他，オンツツジ（７ｍ），コガクウツギ（１ｍ），ハクサンボク（1.7ｍ），アオキ（2.5ｍ），ホソバイヌビワ（1.5ｍ），ヤブツバキ（３ｍ），ヤブムラサキ（１ｍ），ゴンズイ（２ｍ），ハナイカダ（1.5ｍ），ネジキ（４ｍ），リョウブ（６ｍ），エゴノキ（７ｍ），イスノキ（７ｍ），ツリバナ（2.5ｍ～３ｍ），ムラサキシキブ（１ｍ）なども目についた。他には，ヤブニッケイ，ハマクサキ，アオモジ，ネズミモチ，サカキカズラ，

コショウノキなどがあった。

一方，神社裏の林の下では，コツクバネウツギ，ヒサカキ，シキミ，マルバアオダモ，ネズミモチ，ヤブムラサキ，コガマズミ，オンツツジ，モッコク，オオバコ，キジムシロ，タチツボスミレ，ヤマノイモ，チチコグサ，ドクダミ，ガンクビソウ，ヒメガンクビソウ，ヤマジノホトトギスなどが見られた。オオハンゲ，ヤマアイ，チゴユリなどは花をつけていた。

2時35分神社を後にして出発した。今度は大坂の方へは降りずに，田布施の方に出る山道を駆け下った。その間，目についた植物は，ヤブジラミ，ヒメワラビ，ニワトコ，キンミズヒキ，ミヤマシキミ，ハマビワ，ウマノミツバ，クサイチゴ，イズセンリョウ，ツルニンジン，ヤブニッケイ（実），ナシカズラ，ノアズキ，ミズタマソウ，アケボノソウなどだった。

3時頃，鳥居の所に到置。それをくぐって田布施に続いている砂利道を歩き続けた。

コクテンギ，テイカカズラ，ヒメヒオウギズイセン，ミヤコグサ，マルバウツギなどは花が咲いていた。またウツボグサは花が咲いておりとても珍らしかった。ヤマモモ，リンゴツバキには実がなっていた。他に，アオギリ，アキグミ，オオバヤドリギなどが見られた。

4時50分，三田橋を渡って，やっと大野部落へ出た。鳥居からここまでの長かったことといったら……。歩き疲れてしまった。サフランモドキ（花），ミゾカクシ（花）などを見て，バス停を目ざしつつ歩き続けた。バス停に着いてからは，腰をどっかとすえて，皆立とうとしない。ファンタやコーラを飲んでバスを待った。

5時25分，バスが見えてきた。今日の採集会もこれでそろそろ終りだな。疲れたけど，楽しかった。今夜はぐっすり眠ることにしようなどと思いつつバスに乗った。

野間岳調査会（太郎木場）

生　物　部

期　日：１９７３年8月9日～8月１１日
参加者：顧問　佐方先生　山本先生
　　２年　市来勝一郎　牛垣祥成　鮫島　泉
　　１年　物袋幸一郎　中島久之　神野直也　石堂律子　内田よし子　田代洋子
　　永田千晴　西園由加里　馬込一恵　松窪啓子

8月 9 日　今日から待ちに待った生物部のキャンプが始まるのだ。期間は２泊３日である。場所は野間池付近の太郎木場である。山本先生と牛垣君は荷物とともに車で先に出発し，他の者はバスに乗って出発した。９時４５分，玉林小前で下車してすぐ出発。採集しながら歩いた。道路ぎわや，野原には，ヨメナ，クサギ，センニンソウ，ツユクサ，カラスウリ，オトギリソウ，セリ，ベニバナボロギク，ヘクソカズラ，コケオトギリ，コマツナギ，ヒナギキョウなどが見られ，いずれも花が咲いている。水田の畦道にはアゼムシロの花が咲いていて，めずらしかった。

１１時前に黒瀬付近でゲンノショウコ（花），ナガバヤブマオ（花）などを採集して海が見える道に出たのが１１時過ぎだった。歩いて行くと，先発隊の山本先生と牛垣君に会った。日ざしが強く，その中の徒歩は汗はかくし，のどはかわくしで楽ではない。山本先生達が少々うらめしかった。海を下に見ながら西へ西へと歩いて行った。途中，空腹に堪えかねて，広場で日を避けて昼食にした。汗をかいた後の弁当のおいしいこと。しばらく休んでから，生き返ったような気持ちで歩き出し笠沙路を進む。岩場にトベラ，シャリンバイ，ハマヒサカキ，タブ，オオイタビ，ハギの１種などが群落をなしていた。その写真を撮ってまた歩き出す。２時頃，姥公民館の前を通った。ヌルデは花の咲き始めで，モクタチバナ，ゴンズイ，クマノミズキなどには実がある。オオムラサキシキブ，クマタケラン，キツネノボタン，オオマツヨイグサには花があった。カラスウリは樹木におおいかぶさって，いわゆるマント植物の姿を示していた。カノコユリ，ソクズも花が咲いていた。ヒギリの花は鮮紅色でとてもきれいだった。

やがて太郎木場公民館に到着した。「ああ，くたびれた。やっと着いた」と思いながら荷物を先発隊によって設営されたテントの中に置く。幸いにも，公民館長である倉狩さんの好意で，水道および公民館を使用してもよいことになった。夕食は外でして，その後は歌ったり，談笑したりして楽しんだ。夜は，公民館の畳の上に寝た。キャンプの名にはふさわしくないけれども……。

8月１０日　朝食をすませ，８時４５分に女子が作った昼食のおにぎりを持って採集に出かけた。

札内部落を経て野間神社まで登った。ゴンズイ，カラスザンショウ，ベニバナボロギク，シイ，アカメガシワ，バクチノキ，ササキビ，ギョボク，ナルコビエ，ハマヒサカキ，ネズミモチ，帰化植物のマツバゼリ，ナツフジ（花），オオカラスウリ（花），モガシ（実）などを採集しながら登った。札内部落の上方の林の所で植生調査をする。やがて野間神社に着いた。昼食をすませ，その後2組に分かれて採集することにした。1組は頂上付近を，もう1組は横まわりして牧場付近まで観察や採集をした。4時頃，神社のそばの泉周辺の植物調査を行った。そうこうするうち，だんだん空模様が怪しくなってきた。とうとう降り出して，4時45分神社で雨やどりした。しかし雨はなかなかやみそうになかったのでしかたなく走り出した。雨にぬれながら札内部落を通過したのが5時20分。そしてテントに着いたのは5時40分だった。

8時頃，倉狩正鹿さんという方が来られて，植物，住民の話を伺いながら，夕食をいっしょにした。その後はトランプや雑談ですごした。

8月11日　朝食後～10時頃まで太郎木場付近の調査をした。エノコログサの双頭のものなどを採集した。公民館長の倉狩さんのお宅で植物の話を伺い，すいかをごちそうになった。とてもおいしかった。昼食は急いですませ，帰り支度をして1時すぎに出発した。2時30分野間池海岸に着いて30分間海岸植物を採集した。

タイトゴメ，ボタンボウフウ，サツマノギク，シャリンバイ（実），トベラ，ハマヒサカキ，ハマナデシコ，イヌビワ，オオバグミ，ギシギシ，ツルナ（花），ハマナタマメ（花），ラセイタソウ，オニヤブソテツ，マルバツユクサ，ギョウギシバ，オイランアザミなどがその主なものである。3時30分のバスに乗り4時50分に加世田に着いた。

この3日間のキャンプはいろいろなことがあった。水道の水が出ずに女子が水をもらって運ぶのに大変苦労したこと，おふろをもらってとてもありがたかったこと，すいかがおいしかったこと……。しかし今，それぞれのことが楽しい思い出としてよみがえってきます。最後に，いろいろ気をつかってくださった公民館長さん，その他親切にしてくださった方々に感謝したいと思います。

昭和48年度生物日記より

生物部

植物花ごよみ	動物採集観察記
1973年	1973年
4. 5 ムラサキツユクサの花が咲く	
6 シラン・エビネ・ボケが咲く	
8 シンジュ・センダンの新芽がでる	
9 ヤグルマソウ・ガーベラ咲き始める	
12 チューリップ・レナンキュラス・シラン満開，乙女椿が散る	4. 12 図書館横のキンモクセイにヒヨドリが来て実を食べていた ミミズ発見
14 コゴメイワガサの花が咲きはじめる	
16 アブラギリの花が散る，ネムノキの芽がわずかに出ている	
17 フロックスの花が咲きはじめる，フジの花満開，テマリの花が咲く	
18 ハナビシソウ，グビジンソウが咲き始める，楠元病院裏にミヤコグサ満開	
20 コゴメイワガサ満開（磯間山）	23 スジグロシロチョウ目撃
24 クロガネモチが新葉紫褐色に目立つ	24 ナガサキアゲハ（3頭）ジャコウアゲハ（4頭）目撃
26 ニセアカシアの白い花盛り，ネムの葉10センチばかり張る，カナメモチの新葉と花盛り，センダンの花が咲く	
27 ブラシノキの花が咲く	27 オニグモ（♂）発見
5. 1 千日紅の芽が出た，八重松葉ボタンの芽が出た	5. 5 ツマベニチョウ1頭捕獲・5頭発見（秋目）1頭発見（亀ケ丘）卵捕獲
7 センダンの花満開，キキョウソウの花が咲く（消防署付近）	7 ツマベニチョウ2個孵化
8 ガマズミの花満開	8 ツマベニチョウ2個孵化
11 温室内のシクシタチドコロの花が終わりになる	10 ツマベニチョウ1日で3㎜も成長
12 クサヨシの花が見られる	11 センダンの木へアオスジアゲハ飛来
17 ヤマビワの花が盛り，ニワフジ開花	14 アオスジアゲハを校内で目撃
	17 ヨリボシカミキリ捕獲 オニグモ（♀）捕獲

5. 22 マキノブラシのもも色の花満開
24 フェイジョアの花が咲く

6. 6 ネムノキの花が咲く

7. 27 ハマモトの花が咲く
8. 6 水源地周辺の植物
サルトリイバラ・ヤブムラサキ(青)
ササクサ・トキワヤブハギ(白)
ハナミョウガ(青)ヤブランが目についた
21 イヌビワの果実の落下
11. 3 落葉がはじまった

1974年

2. 12 ボケの花が咲いている
21 梅・桜の花が咲きはじめる
クロッカスの花が咲いている
3. 1 ユキヤナギの花が咲いている
5 アカシアの花が咲いている
パンジー・クロッカスの紫色が咲く
29 チューリップの花が咲きはじめる

5. 17 ヤマシロオニグモ(♀)捕獲
19 モグラ解体
6. 2 ツマグロヒョウモン校内で発見
11 ベニシジミ目撃
15 ネムノキにアゲハ(3〜4頭)発見
19 モンキアゲハ・ジャコウアゲハ・ナミアゲハ・コミスジ・モンシロ目撃
20 ナミアゲハ・クロアゲハ目撃
21 ジャコウアゲハ・アオスジアゲハ・ナガサキアゲハ・ナミアゲハ目撃
22 ナミアゲハ・ナガサキアゲハ目撃
27 ジャコウアゲハ目撃
28 キアゲハ・ナミアゲハ目撃
7. 5 ジャコウアゲハ・モンキアゲハ・ナミアゲハ・ナガサキアゲハ目撃
16 キアゲハがさなぎから成虫になる
奇形で羽1枚ちぢんでいる
8. 6 ノウサギの子発見
9. 23 校内でヘビ捕獲
11. 15 ハクセキレイを目撃
16 ツグミを目撃
12. 11 せみの幼虫を発見

1974年

1. 26 メスジロハエトリ(♀)アリグモ(♀)ヤサコマチグモ(♂)ヤサアリグモ(♀)
2. 1 ウデブトハエトリグモ(♂)捕獲
6 アシブトヒメグモ(♀)ボカシミジングモ(♀)捕獲
21 ゴミグモ・アジアカハシリグモ・コミロガネグモ・コガネグモ捕獲
28 ヒヨドリを目撃
3. 1 ヒヨドリ・モンシロチョウを目撃
5 ハクセキレイとツバメが遊んでいた
28 ツグミ1匹飛来

ネムノキに来るアゲハチョウ

1年　東　直子　森　紀和子

今年もまたネムノキの花を求めて，アゲハチョウが飛来するシーズンとなった。例年通り毎日3回（朝，昼，夕方），6月10日から7月9日までの1ヶ月間，継続的な観察をしてきた。日曜日も観察するということは，たいへんなことであったが，7日を除いてかかさずに観察ができたことはよかったと思う。チョウの飛来数が少なかったために，かぞえるのが困難だったということもなかったので，誤差は少ないだろう。ともかく下記のようにまとめてみた。

＜目的＞

① 本年度の各アゲハチョウ類の発生個体数の概要を知り前回のものと比較してみる。

② 本年度の各アゲハチョウ類の発生個体数割合より，どのようなアゲハチョウ類がもっとも加世田市近郊に多いか調べる。

③ 各アゲハチョウ類の飛来数より発生時期を調べる。

④ 朝・昼・夕方の時間の違い，天候の変化などの違いやその他のことから，飛来個体数がどのように変化するか，その変化の原因は何かを調べ，その習性を検討してみる。

○観察期間　1974年　6月10～7月9日

○観察時間　〔A〕　8：30 ～ 8：35

〔B〕　13：00 ～ 13：05

〔C〕　16：50 ～ 16：55

○種　類　ナミアゲハ

ジャコウアゲハ

クロアゲハ

ナガサキアゲハ

モンキアゲハ

以上のようなことをもとにして，次ページに表をかいてみた。

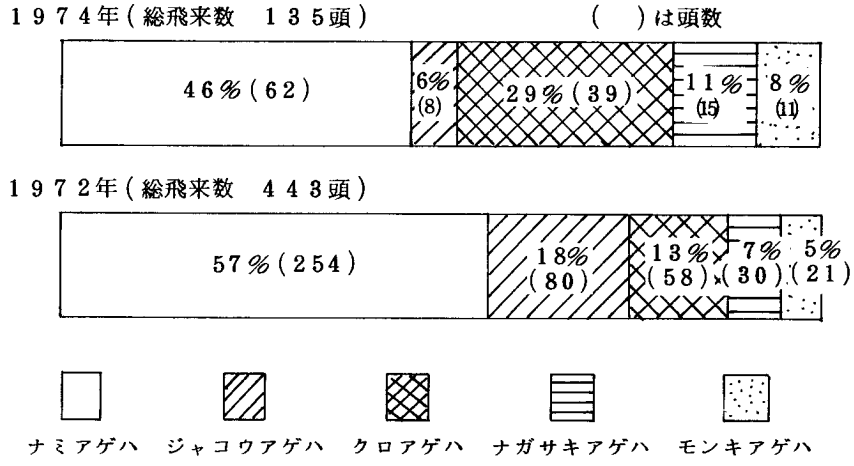
これは，時間別・種類別に表わしたアゲハチョウ飛来個体数である。

天候などの違いから，どのような変化がみられるかを知るために，天気・気温を時間別に調べたので，これもつけ加えておく。

〔第Ⅰ図〕

		6/10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	7/1	2	3	4	5	6	8	9
天　気	A	⦶	●	◎	●	●	⦶	⦶	●	●	⦶	⦶	●	⦶	●	⦶	⦶	⦶	●	⦶	⦶	⦶	◎	⦶	⦶	⦶	⦶	◎	⦶	⦶
	B	⦶	◎	●	●	◎	⦶	⦶	◎	⦶	⦶	⦶	●	⦶	●	⦶	⦶	⦶	●	⦶	⦶	⦶	⦶	◎	⦶	⦶	⦶	◎	⦶	⦶
	C	●	◎	●	●	◎	⦶	⦶	●	●	⦶	⦶	◎	◎	●	⦶	⦶	◎	◎	⦶	⦶	◎	◎	●	⦶	⦶	◎	◎	⦶	⦶
気　温	A	23	23	22	20	20	19	22	24	24	23	20	25	22	24	21	21	21	22	23	21	25	23	24	26	27	25	28	28	29
	B	27	23	23	20	22	22	29	26	26	25	25	25	25	24	24	25	26	25	25	25	27	27	28	29	31	30	28	31	31
	C	26	24	23	21	23	27	27	27	24	25	26	22	25	24	25	24	26	23	26	26	23	26	26	31	31	31	×	32	30
アゲハ	A	1					3	1		1	4	2		3		2	1			1			1							
	B		1			1		1	1	5	5	3	1	3				1				2								
	C						7	2		1	2		3	1		2														
ジャコウ	A						2																							
	B								2		1																			
	C			1		1	1																							
クロ	A							1			1									1			1							
	B						2	3		4	1		1				2						1							
	C					1	1	2			5	1	4	5			1												1	
ナガサキ	A																													
	B			1		1				1	3													1						
	C			3							1			1												1			2	
モンキ	A										2			1			1													
	B								1	1				1																
	C					1					1		2																	
合　計		1	1	5		5	16	10	4	13	26	6	11	15		4	5	1		2		2	3	1		1			3	

〔第Ⅱ図〕　種類別飛来数割合



結果と考察

例年通りナミアゲハの占める割合が大きく５割近くを占めている。しかし前回と比較して大きく違う点は，ジャコウアゲハで１８％から６％に減少していること，また逆にクロアゲハでは，１３％から１９％に増加していることである。（第Ⅱ図を参照）

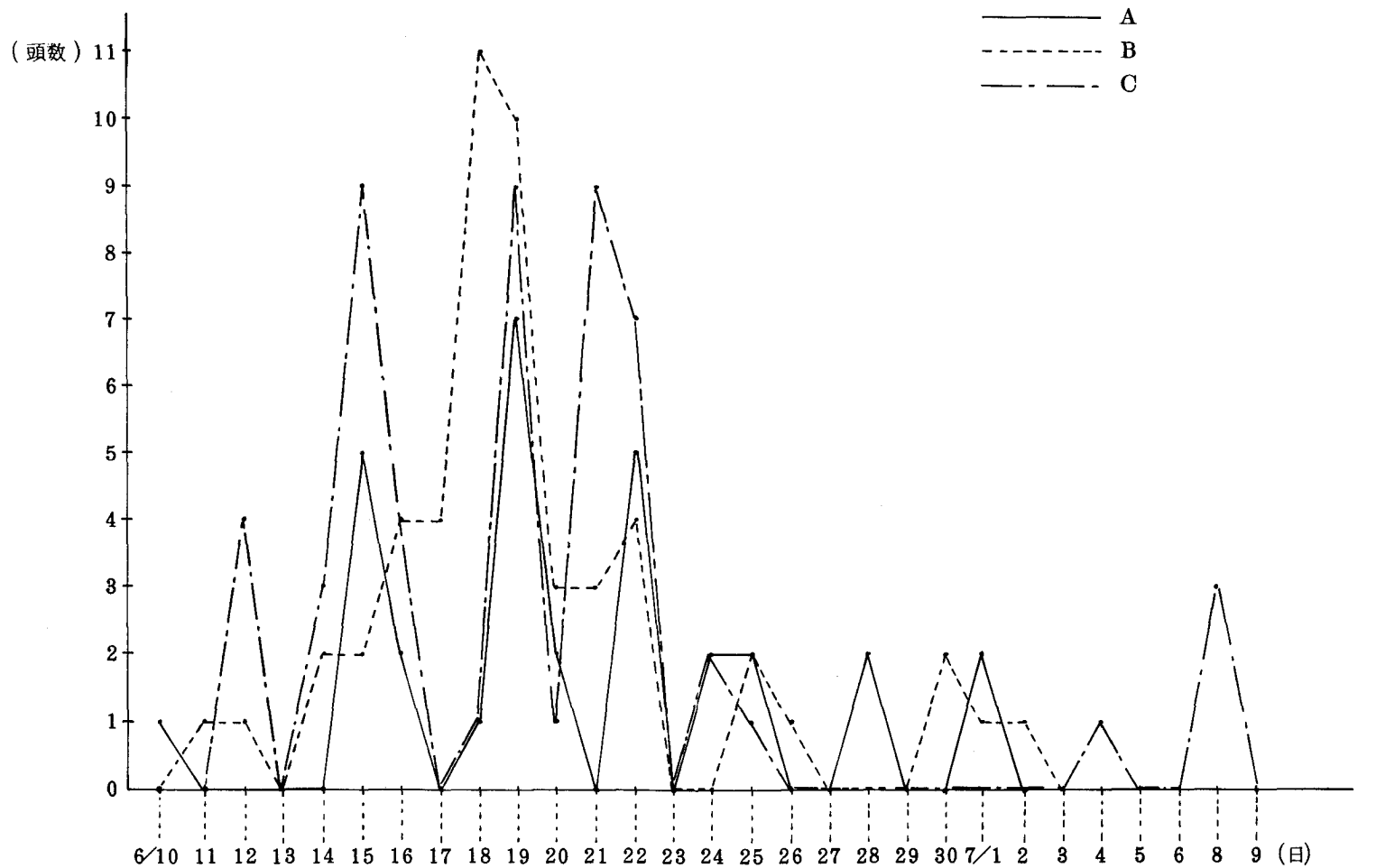
飛来個体総数についていうと，今年は，かなり減少している。種類別にみると，ナミアゲハは前回の2.5割で，ジャコウアゲハは，減少が著しい。その他のものも，それぞれ半減していることがわかる。しかし，アゲハは，どこでもよく見うけられるので，直接発生個体数と関連するとはいえないだろう。またこの減少の原因については，はっきりとこれといえないが，ただ例年最も飛来数の多い６月中旬から下旬（ネムノキの花の満開期）にかけて，雨の日が多かったことがあげられるのではないだろうか。（第Ⅰ図を参照）しかしこれだけでは，不十分であり，今後どのように変化していくか注目すべきであろう。

飛来個体数の多い時期は，６月の中旬から下旬にかけての１０日間足らずであった。この間，飛来数の一番多かった時は，１８日のB（１３：００～１３：０５）の時間で１１頭であったが１９７２年度と比較するとひじょうに減少している。時間別にみると，A（８：３０～８：３５）の時間が比較的少ないようだ。〔A：３０頭，B：５１頭，C：５４頭〕　（第Ⅲ図を参照）

反　省

以上のようにまとめてみたが，知識不足のため，まだまだいろんな方面から研究・観察ができなかったので残念に思う。これからも，ずっと続けていってもらいたい。

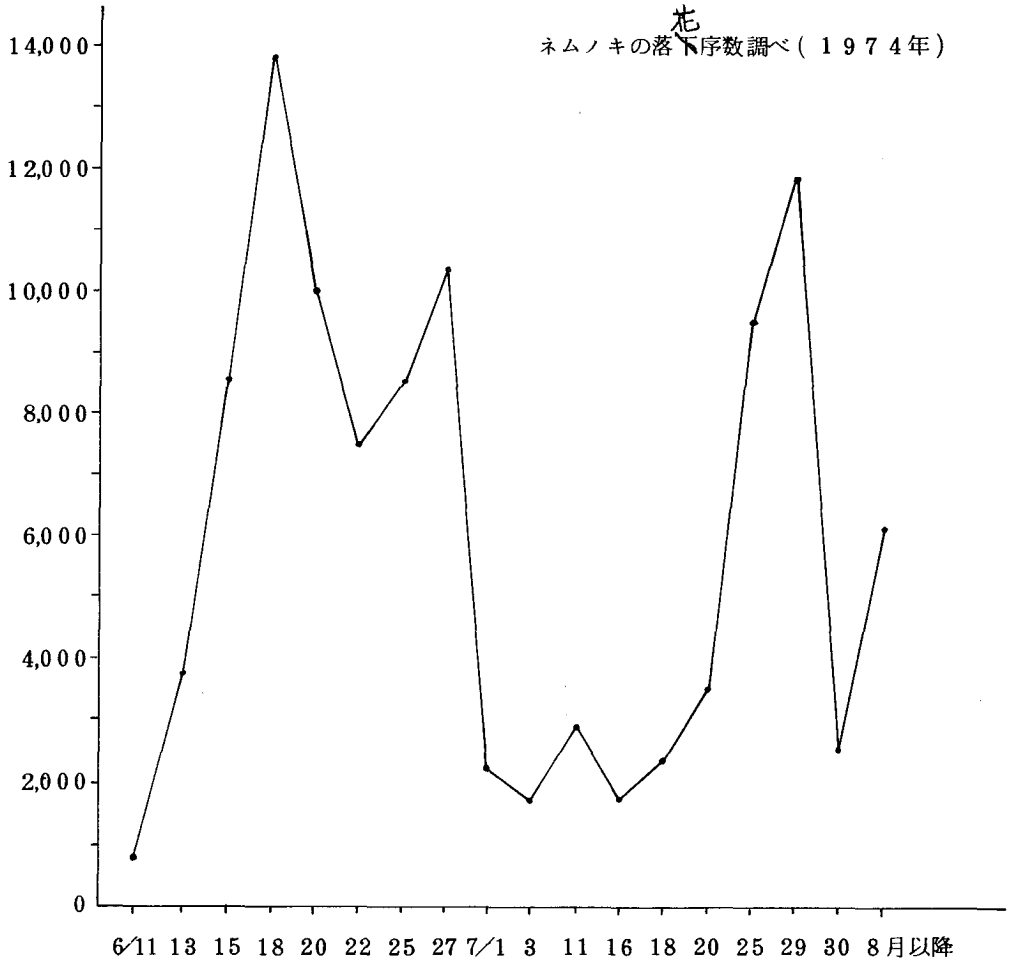
〔第Ⅲ図〕　ＡＢＣ各時間におけるアゲハチョウの飛来数



１９７４年度ネムノキの落花と結実

1年　泊　美也子・宮下菜穂子

この調査は今回で６回目である（第５回目は備考参照）。
調査は６月１０日から９月２８日までであった。
落花序本数は１０７８６７本で，結実した果実が３６９個で結果率0.３４％である。



備考：第５回目の調査（６月１１日～７月２６日）では，落花序数が１４２１３８本，果実が５１８４個で結果率が3.６％となった。果実の5,１８４個という数には疑問があるが，参考までに記した。

プラナリアの再生

1年　森　三千子

プラナリアについて

へん形動物，三岐目の代表的なもので，和名ウズムシ（渦虫）といい体は扁平で前後に長く，暗褐色，体長３０㎜以下。頭部は三角形。両側の耳葉を上下で振りつつ泳ぐ。眼一対。流水州広温性で，静水域に出現。北海道より台湾に分布。分体による無性生殖が盛んで再生する。

1）観察の目的

再生能力の大きいプラナリアがどのように再生するか調べてみた。

実験に用いたのは，干河の大原部落で採集したもの。

2）観察に用いた材料

プラナリア，井戸水（水道水には，塩素が含まれているのでそれを使うと死ぬ恐れがある。）

ヤクルト，ゆで卵，シャーレ，スポイド，スライドガラス

3）実験方法

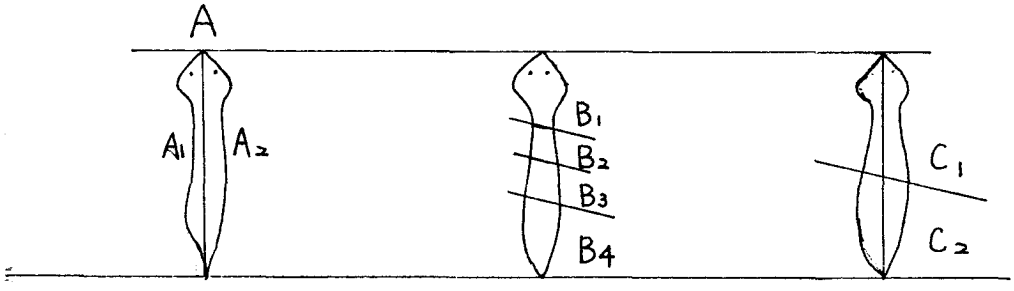
プラナリアを水を一滴おとしたスライドガラスの上にのせ，スライドガラスの下に氷をあて，プラナリアの動きを止めておいた後，カミソリで次のページの図のように，縦に４つの部分に切断して，シャーレの中にいれて別々に飼育してみた。

4）えさのやり方

えさとしては最初ヤクルトを３０倍にうすめて与えていたが死んでしまったので，卵の黄味を与えた。量が多いと，卵にかびがはえ，そのかびがプラナリアについて死亡したものであった。

◎　観　　察

プラナリアをＡＢＣの部分を切断し，それぞれ水を３分目ぐらい入れた別々のシャーレに移し，暗室に保管，最初はあまり変化はみられなかったが，しだいに褐色の再生芽がでてやがて，それが成長し，もとの形にもどってゆく。そのさいに白い色をおびてくるため，観察しにくいものもあった。又，それと反対に再生しはじめた場所は，白く肉眼で観察がある程度まで可能であるものもあった。



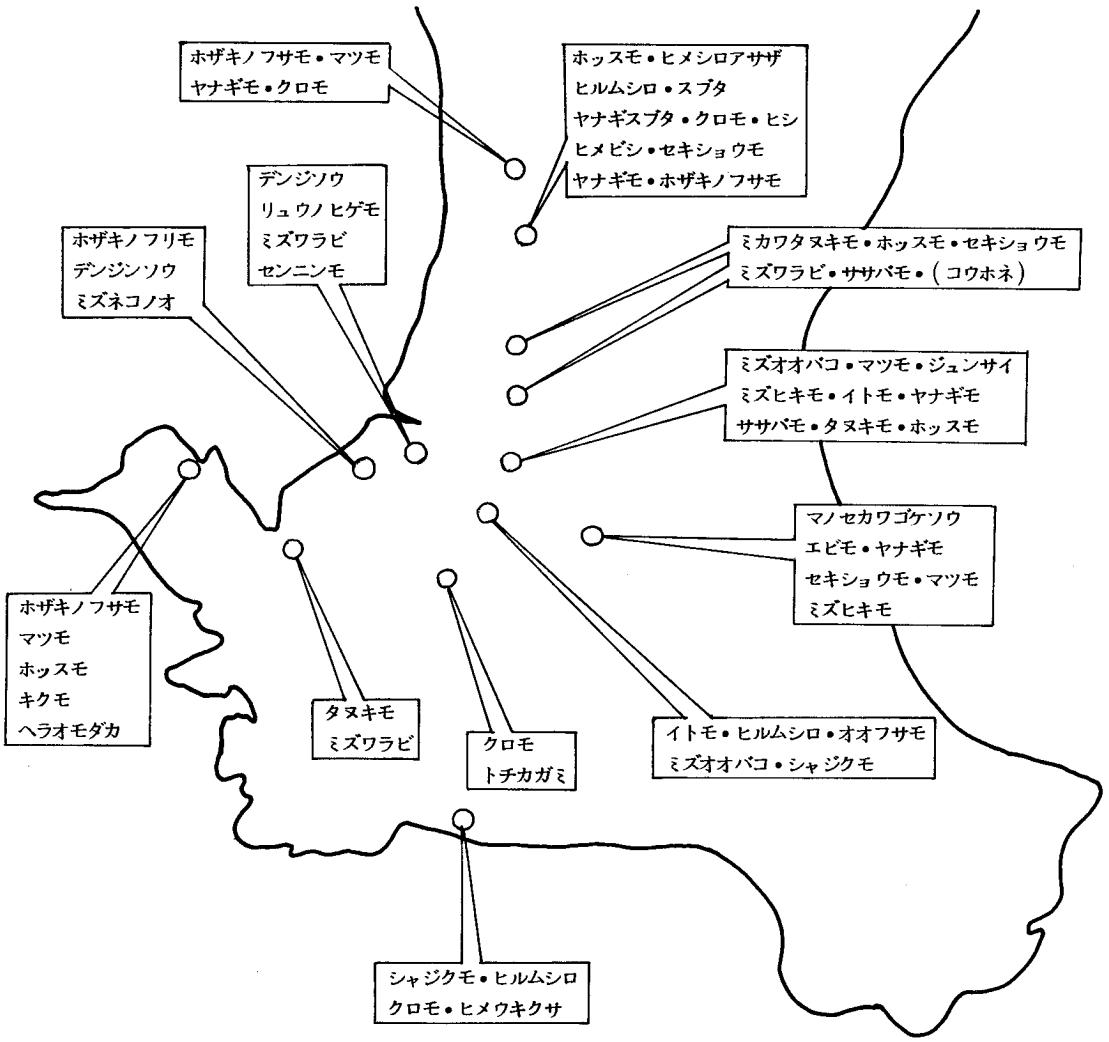
	A		B				C	
	A 1	A 2	B 1	B 2	B 3	B 4	C 1	C 2
3 日目								
5 日目								
8 日目								
10 日目								

南薩淡水草調査

1年　泊　美也子・田宮淳子

1. 水草の分布

１９３１年，土井美夫氏は，吹上駅付近湖水中から，ヒシ・ホテイアオイ・タヌキモ・マコモ・ヨシ・シチトウ・カンガレイ・クログワイ・フラスモ等１４種，田布施の池沼中から，シマヒメタデ・マルバオモダカ・ヒメミクリなど9種を記し，１９６４年，初島住彦氏は，薩摩湖などから，オオアブノメ・スジヌマハリイ・ウキシバ・オオトリゲモ・スギナモ（以上南限）などの１６種を報じ，同年，新敏夫氏は，ハナビフラスモを記録している。１９７３年，大滝・浜島両氏は，同地にオオトリゲモ・センニンモなど８種を確認しているが，南薩西部の地域では水草のまとまった報告はないようである。



2. 水草（水生・湿生）の分類

（　）は１９７４年以前の採集品

	沈水・浮水	湿生（水田・溝など）
種子植物 双子葉植物 〔合弁花類〕	タヌキモ ミカワタヌキモ キクモ ヒメシロアサザ	ミゾカクシ　アゼナ ミズネコノオ　コシロネ （ミミカキグサ）　アブノメ スズメノトウガラシ アゼトウガラシ
〔離弁花類〕	ヒシ ホザキノフサモ ヒメビシ オオフサモ マツモ ジュンサイ （コウホネ） マノセカワゴケソウ	セリ　タコノアシ チョウジタデ　（タガラシ） キカシグサ　ミゾソバ ミズマツバ　ハンゲショウ （ミゾハコベ） （ヒメオトギリソウ） ミズハコベ シロバナサクラクデ
単子葉植物	クロモ　ササバモ ホテイアオイ　イトモ セキショウモ　ミズヒキモ スブタ　エビモ ヤナギスブタ　ヒルムシロ トチカガミ　リュウノヒゲモ ミズオオバコ ウキクサ アオウキクサ ヒメウキクサ ホッスモ オオトリゲモ センニンモ ヤナギモ	コナギ イボクサ カヤツリグサ科多数 イネ科多数 オモダカ ウリカワ ヘラオモダカ （ミクリ） （ガマ） タヌキアヤメ ホシクサ ゴマシオホシクサ クロホシクサ （マルバオモダカ）
シダ植物	ミズワラビ アカウキクサ	デンジソウ

薩摩湖水草の分布について

1年　里園菊代・田宮淳子

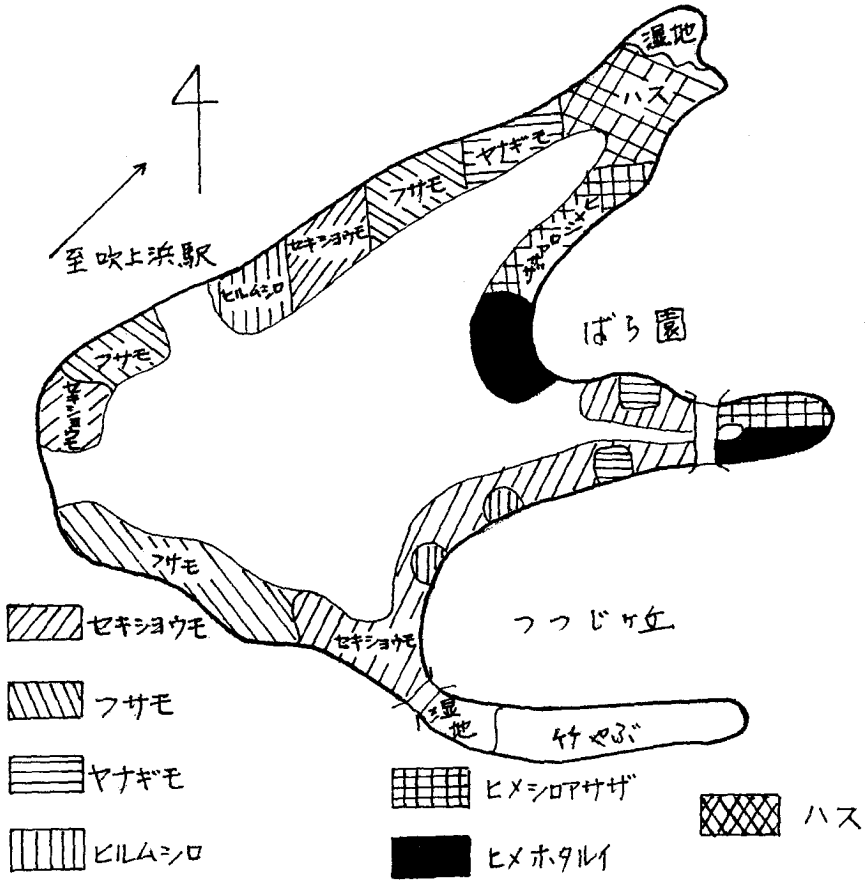
砂丘内側の低地が年長月に漸次水を透さないように変化してくると，ついには満々たる水を湛えて湖沼になる。このようにしてさつま湖はできた。原名は「中原池」である。これは，藩政時代において，池の大半が中原村に位置していたからである。「さつま湖」と改名したのは，昭和３３年のころ，鹿児島交通が，中原池周辺を観光地としてＰＲするために，池ではまずいからである。

１９６４年発刊の「鹿児島の自然」によると，オオアブノメ・スジヌマハリイ・ヒメシロアサザ・ウキシバ・キカワタヌキモ・オオトリゲモ・ホザキフサモ・イバラモ・シマヒメタデ・スギナモなどの水草が生育していたとある。１９７４年８月の調査によると，セキショウモ・センニンモ・コナギ・ヒルムシロ・ヒメシロアサザ・ヒメビシ・ヒシ・ヒメホタルイ・ハス・ホテイアオイ・ホッスモ・ミカワタヌキモなどの水草が生育していた。

昨年夏（１９７４年）私たちが薩摩湖の岸近くに沿う水中に生育している水草の分布を調べてみた結果は次ページの図のようであった。

全体的にセキショウモが分布していて，フサモ，ヤナギモが一群となり北側に分布している。同じく北側の湿地帯近くには，ハス・ホテイアオイが大きく広がり，ばら園のまわりには，ヒルムシロ，ヒメシロアサザをはじめとして，クロモ，ヤナギモなどもみられた。つつじケ丘の北岸には一様にセキショウモが広がり，岩の間に間にヒルムシロ，ヒシ，ホタルイなどが大きな長い根をのばしている。つつじケ丘の西岸は，水が他よりなまぬるく，ササバモ，ヒシ，フサモ，クロモ，ヤナギモ，などが，セキショウモにつつまれている。なお湿地帯には，ホテイアオイ，ヒメシロアサザがあり，今は竹やぶとなったあたりは，四，五年前は湖の一部となっていた。

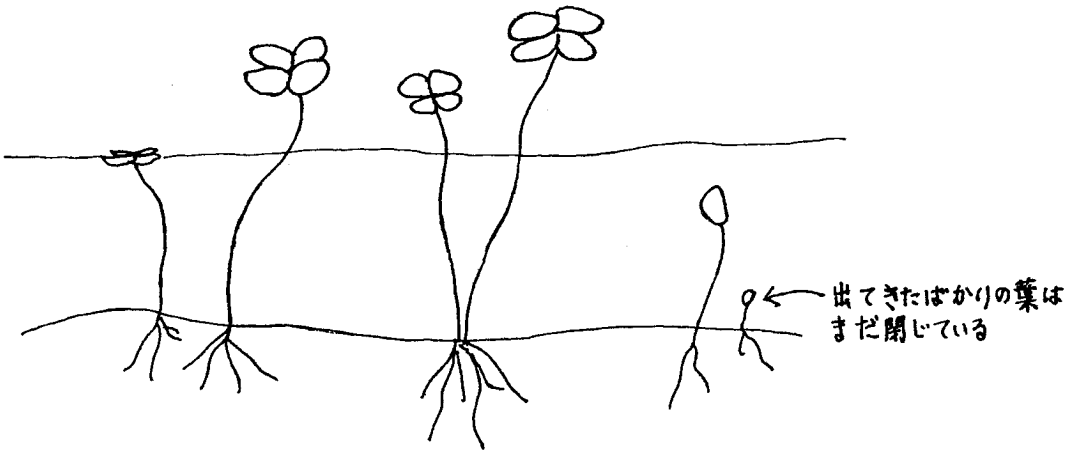
湖岸全域に約十六種類もの水草が見られ，あまり気にとめなかった水草というものを再認識したようだった。又これからも，他の動物への役割とか，場所や水温などと分布との関係，繁殖状況なども調べてみたいと思っている。


至吹上浜駅
湿地
ハス
ヤナギモ
フサモ
セキショウモ
ヒルムシロ
ヒメシロアサザ
ヒメホタルイ
ばら園
フサモ
セキショウモ
フサモ
セキショウモ
つつじヶ丘
湿地
ケケやぶ
セキショウモ
フサモ
ヤナギモ
ヒルムシロ
ヒメシロアサザ
ヒメホタルイ
ハス

水草（デンジソウ）について

1年　吉見敦子

葉が開いた時の形が「田」の字に似ているところからデンジ（田字）ソウとなったのだそうだ。



越路の先の方の田んぼで見つけた。8月の中頃はまだ水が残っていたが，9月の頃は水はなかった。それでも生えていたところをみると，水はたまっていなくても湿地であればいいようだ。しかし生えている所はその田の片隅だけだった。家に持って帰って水そうに入れておいた。完全に水中に沈んだ葉は枯れてしまった。水に浮いていた葉もだんだん枯れてきたが，また新しい芽もどんどんケ月以上生きていたが，そのうちこれも枯れてきた。

11月初旬に観察した。雨，曇りの日は6時頃から，晴れの日は7時頃から閉じ始めた。水に浮のびてきた。根を土に植えてやらなくても1ケ月以上生きていたが，そのうちこれも枯れてきた。

① 普通の状態（次ページ図のように葉の1枚1枚をa，b，c，dとする。）

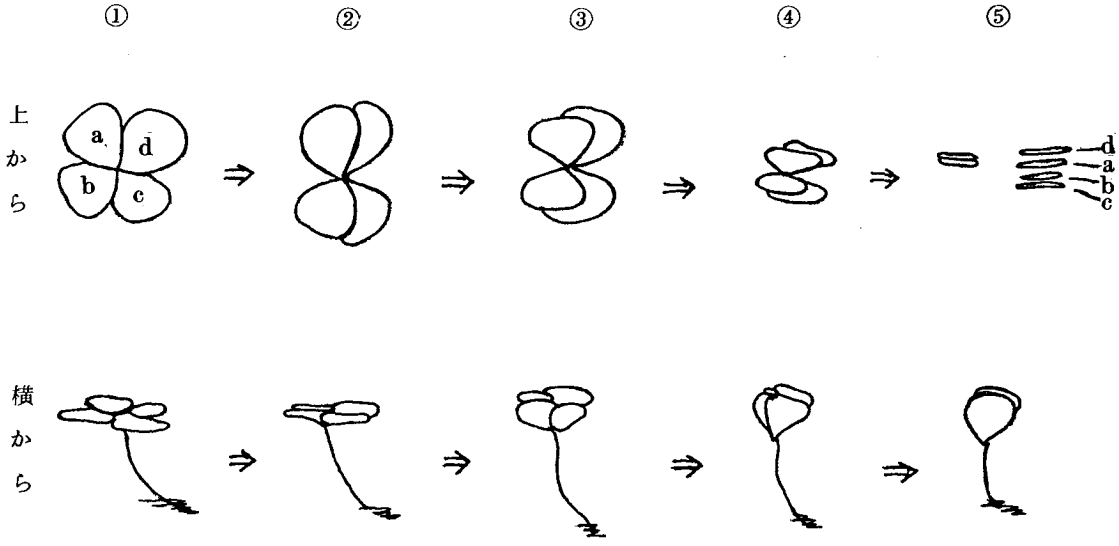
② aの下にdが，bの下にcが重なって，水平に広がっていた葉が少しおきてきた。

③④ 重なっている部分が多くなって葉もだいぶおきてきた。

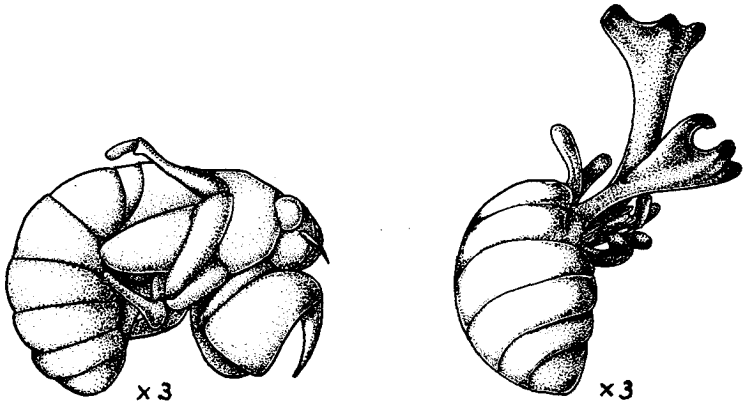
⑤ 上から見ると一の字のように見え横から見ると一枚の葉のように見えた。すっかり閉じてしまったのである。

※ 3日ぐらい続けて観察したが，同じような状態で閉じていった。午前6時10分に起きた時はもう葉は開いていた。

開き方と開閉運動の詳しい時間的な経過を調べなかったのは残念であった。



（短報）　セミタケ



地中のセミの幼虫に，寄生する菌類，棍棒状で高さが数センチメートルある。分枝することもあり，淡黄かっ色で胞子は糸状である。この絵は，１９７２年に，真下先生が大浦町峠坂の茶園で採集されたものを，宮原康展さんが写生したものです。

ノビル成長測定

1年　姥　　まり

ノビルは5月ごろから花をつけるユリ科の植物である。5月～7月ごろに目立たない花を咲かせ，また，川ぞいの土手や，道ばたで誰れもがよく見つける。

ノビル……ユリ科　6弁花で散形花序　多年草

やく……淡紫色　　花柱……1本のまっすぐな糸状

葉……2～3片互生，肉質，やや3稜形をなす浅い溝，下茎がさやになって花茎をつつむ

横に子球をつけて繁殖　　このようなことが辞書に出ている。

しかし，成長についてはくわしくなかったので，観察することにした。ノビルは，その名のように，まさに上へ短期間でひょろひょろと伸びる植物である。

まず，5月2日から花のついたノビルを鉢に植えかえて観察した。ノビルの伸び方を調べやすいように，赤インクで2cmおきにしるしをつけておいた。鉢のおのおのには，A・B・Cと記号をつけて観察した。2cmおきのしるしは，下から計ってつけた。

1) Aは2cmおきのしるしが18こ（上から下まで35.9cm）
　Bは　〃　20こ（　〃　38.2cm）
　Cは　〃　19こ（　〃　36.3cm）

観察は1日おきにやったが，Cは，5月13日に枯れてしまった。よく調べてみると，茎の中に虫の幼虫がはいっていてすぐに折れた。虫の名は幼虫のためはっきりつかめなかった。
初めての観察で根気がいることもわかった。まず，5月2日からはじめた観察は，花がしぼんだ5月21日までにした。結果としては，

2) Aはしるしの上から2，3番目が成長した。しるしをつけたときは，2cmだったものが，
　上から2番目は，3.0cm
　上から3番目は，2.5cm　となった。
　Bは，観察をはじめたときには，一番高かったせいか，それほど大きな変化はみられなかったが，上からしるしの2番目が0.1cm伸びていた。
　またCは，虫に食べられて枯れる前の結果（5月12日まで）を出すと，しるしをつけた上から1・2・3番目が伸びた。一番上の花のすぐ下が0.05cm，2番目が0.5cm，3番目が，0.1cmずつ伸びていた。

結果としては上のようなことであったが，まだ，下の方も，0.1cmふえていたところや，0.1cm低くなっているところなどあったが，これは，1日間だけのことだったりしたため，測定時の誤差とした。

次は，ノビルの伸び方をグラフにするため，もう一度植えてみた。

7月17日(水)　放課後学校の土手のノビルをほりおこした。大きな球根は芽が出たのがみられたが，根は出ていなかった。ほりおこしたうちの4個を選び重量を計った。1コの重量は，計りにくいので，2コ3コとのせて計った。

2コでは2.6g
3コでは3.6g
4コでは4.85g
} 1コが約1.2～1.3gと予想される。

7月18日(木)　鉢植えにした。(3コ植える。縦1.2cm，直径1.1cm)

8月22日(木)　久しぶりに，植えなかった方のびんの中のノビルをのぞいてみると，全体が緑色になってきていた。

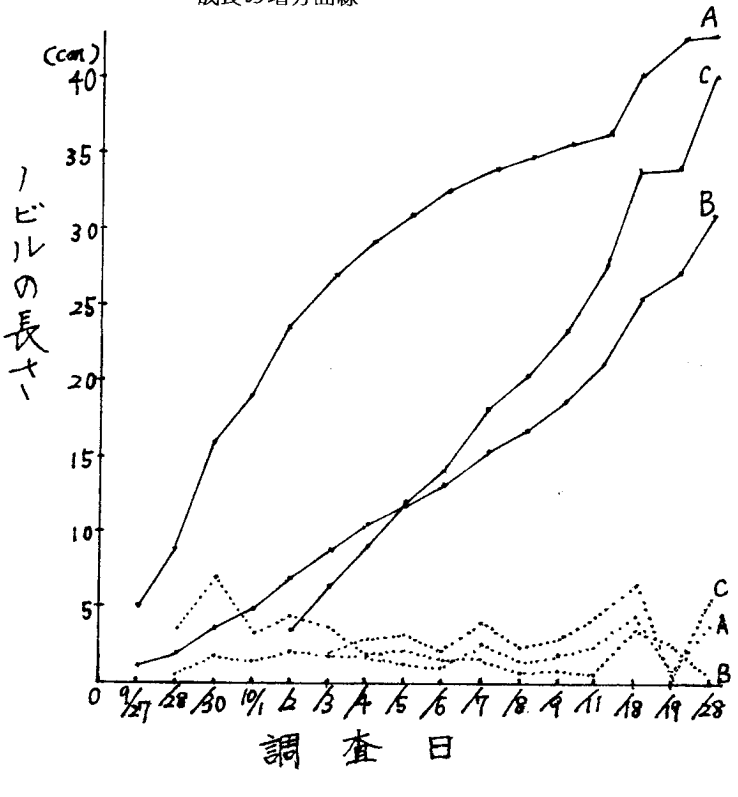
9月25日(水)　鉢に植えておいたノビルが芽を出し始めていた。ほりおこして，見取り図を書いて，また，丁寧に植えておいた。3コのうち2コは芽が出た。

結果は1回目(5月のとき)と同じで，細胞分裂の激しいところは，上の花のつく，少し下の方である。

9月27日～10月28日までの調査結果

——— 成長の大曲線

------- 成長の増分曲線



ラットについて

2年　西園 由加里

文化祭の解剖用にもらってこられ，ある部員のたっての願いで生き残ったラットについて少し書いてみたい。

赤い目に白い毛，奇妙な１０cmほどのしっぽをもち，身長１５cm，中肉のラットは，よくうさぎとまちがえられ，たいへんかわいい存在だった。ふだんは，うずくまっていることが多かったが，動くとすばやく，手をだそうものならガブッとくるのであった。被害者が２人でて，ペストになりはしないかとずいぶん気をもんだものであった。この少し狂暴性というか，自衛の本能の発達したラットは「朝太郎」と命名され，部員の愛にはぐくまれて（？）育ったのであった。

次に，生活状況を書いてみよう。飼育用の箱に，数枚の新聞紙を敷き，その上にわらか，乾いた草を入れ，水の入ったシャーレをおいて，１日おきに箱と新聞紙をとりかえていた。箱とシャーレは，ホースを使って洗っていたが，直径７mmほどの丸いフンがこびりついていて，とれないことも多かった。そんなときは，木枝などでこさぎとっていた。一変して，えさは，お弁当の残りのごはん，たまごやき，ソーセージなど，毎日，新聞紙にのせ入れていた。体が小さいのであまり食べていなかったが，よくたまごやきに歯形が残っているのが，目についた。

冬の間は，ストーブのある室内に箱をおき，夏は廊下で飼育した。冬の日に一度，日光浴のために，ふたをはずして外にだしておいたところ，いなくなってしまった事があった。床下とか，いそうな所をいろいろさがしまわったがなかなか見つからなかった。ちょうどその頃は，校内に野良犬が多く，もしやと思い心配していたところ，箱から５mほど離れた所にある枯葉でおおわれた木の根元にうずくまっているのが見つかり，ホットした事があった。

そうこうしているうちに，朝太郎も老令が訪れ，だんだん衰弱していった。そして，ついにラットとしては，かなり長生きをし，１年半の生涯を終え今は，生物室の前のネムの木の根元に静かに眠っている。

1974年4月29日 Mon 晴

蔵多山（第1回採集会）

2年　田代洋子

参加者　顧問　山本先生
　　3年　市来勝一郎　鉛山茂久
　　2年　物袋幸一郎　神野直也　中島久之　石堂律子　田代洋子
　　1年　森　紀和子　森　三千子　東　直子

昨日あるはずだった蔵多山採集会が，延期になった今日はまったく雲一つない天気である。加世田発，8時4分の汽車に私は，内山田駅で乗りこんだ。上内山田駅で下車。私が忘れた，網のリングを駅の付近にあった針金と野生竹で山本先生に作っていただいた。私は“先生は器用だなあ”とひそかに感心した。春の日ざしは暖かいというよりも暑いという感じであった。虫たちも春の日ざしにうかれて出ていたが，同種ばかりで大して変った種類のものは見あたらなかった。歩き始めてまだ1キロぐらいのあたりで，山本先生が近くにいた我々を呼んで土手の日当りの良い所に咲いていた花の名前をいわせた。それは青く小さな可憐な花であった。もちろんその花は初めて見る花ではなく，どこにでも咲いている花である。たしか1年の地学の授業で先生が花の名前を教えて下さり，私はその意味を辞典で調べたのを記憶している。こんな事ほどよく覚えているものである。それは「オオイヌノフグリ」という名であった。昆虫は，こめつき虫やジョウカイボンなどが多く出ていた。こめつき虫はおさえると米をつく格好をするので，この名がついたと言うおもしろい虫である。ジョウカイボンとカミキリ虫は，以前はよく間違ったものだったが，両者の違いもわかってきた。それにかみきり虫は見あたらない。なんといっても葉虫が一番多かった。蜘蛛班も，たしかに頭数は多かったようだが，ジョロウグモなどのようなありふれた種類しかいなかったようである。植物箱は佐方先生がいらっしゃらないので山本先生と行動を共にした。ノビルの1m以上もあるものを採集した。（これは学校に持ち帰って，その生育状態を観察した。）蝶班は一番先頭を歩いている。いろいろ採集したようである。内山田から登るのはあまりに遠すぎたようである。昼をすぎても登り口にも着かない。すき腹をかかえてこれ以上歩くのは困難と考えたのか待ちに待った昼食である。道ばたであるので，車で通る人々が不思議そうに見て通るが，そんな事など気にもならない。とにかくおなかがすいたのだ。

やっとのおもいで頂上に着いたのは，午後3時ごろ。頂上からの遠望はすばらしい，冷たい風が快い。疲れが癒えるようだ。不思議だなあ，トイレはあっても水道はない。そんな事を考えているうちに，休憩は終わり，津貫の方へ下山を急いだ。1時間くらいで下山し，駅に着くと汽車の時間にはしばらくある。疲れたけど，すごく楽しい一日だったなあ。

１９７４年7月３０日（TUE）

冠岳・仙人岩採集記（第３回採集会）

1年　姥　　まり

７月３０日午前１１時，補講の終わった後で，佐方先生，山本先生，中島さんとわたしの四人で，串木野の北東にある冠岳をめざして出発した。車中，地図を広げて国道３号線を走った。道路の両わきの真っ赤なカンナの花が，一層暑さをかきたててにぎわっていた。ところどころにひまわりも，わたしたちを迎えていた。串木野で，国道３号線を右にそれて，市役所の東の道路を市比野へ向けて走った。最初に食料補給のために車を止めた。イヌノキの茂った枝に実がついていた。車は，だんだんと上へ登り始め道路が悪くなった。王冠の形をした山が遠くに見え出した。先生のお話ですぐそれが，冠岳だと知らされた。途中で車を止めて，ノコギリソウを取った。白い小さな花がいっぱい集まったものだった。葉はふちがのこぎりのようになっていた。もうノコギリソウの季節は終わろうかとしているのか，下の花が枯れていた。車は冠岳に直行した。でこぼこの悪路が，途中で舗装道路に変わった。海抜３７５メートルのところの広場で車を止めた。頂上までの山径は，まだ数百メートルあるのだろう。ここで昼食にしたが太陽が，頭上で照りつけているので，日影を求めて，少し降りて行った。そこには，クリの木が，２・３本あり，まだ青い実がついていた。トゲもあまり痛くなかった。わたしは，はっきりとクリの木を見たのは，初めてだったので珍しかった。持って帰ろうと実のついた小枝を２，３本折った。その木の下で弁当をわけてもらって食べながら目の前の，アオモジ，ガマズミの木の話をして昼食を終えた。山本先生は，持って帰ると言われて，クリの木の反対側のがけの小さなガマズミの木を採られた。チョウもよく見かけた。登る途中にキチョウがいた。昼食の場所にもキチョウがいた。車のそばにあった小さい白い花はどことなくノコギリソウに似ていた。オカトラノオという植物だった。

冠岳を降りるときには，車のスピードをゆるめ，植物をよく観察しながら行った。珍しい植物をみつけたらそのつど車を止めた。２度目ぐらいに車を止めたとき，植物といっしょにイシガケチョウを見つけた。アオバセセリの幼虫も一びきヤマビワの木に見つけたのでつれて帰ることにした。山本先生はこの二種類の採集が一番の収穫だといわれた。それほど珍しいチョウらしい。よく観察して見ると，羽が，変わっていて，まるで，世界地図を手でチョウの形に破いて作ったようなのが，イシガケチョウだった。降りるときに採集した植物では，（コバンモチ，マルバキブシ，ナシカヅラ，マルバアオダモ，キブシ，ネズミモチなどだった。）ヒロハコンロンカの白い白は珍しかった。また夏の山は，青葉におおわれて，花が見られないと思った。春のうちに花をつけていた木々が多かったのか，目につく大部分が実をつけていることが印象的だった。時計は，いつのまにか２時になろうとしていた。もと来た道をふもとまで下ると車は分岐点から左折して仙人岩への道を急いだ。

仙人岩に着くと，入り口のところに，『車の乗り入れを御遠慮ください』という立て札が目につ

いた。車を駐車場に止めて大きな木々の中を歩き始めた。ここには名を知らない多くの植物が生育していた。いろいろな祠があった。小さな川を隔てて向こう側には，煙草神社とか，防主墓といった札が目についた。静かなところで，植えられてある木には，モミジとかギンモクセイ，ナタオレノキなどがあった。仙人岩は神社の右側にあった。シュウカイガンでできているそうだ。ここで，2時間ぐらい過ごした。山の中は，夏の暑さを避けているのか蚊がうなっていた。わたしは，しかたなく動き回ったり，補獲縄で蚊をおい払ったりした。タチツメクサが最初に目についた。シロツメクサの間にピンクの花をのぞかせていた。わたしは，シロツメクサの花がピンクになったのかとばかり思っていたがシロツメクサの仲間もいろいろあることがわかった。この他に，紫色の素朴な感じのするムラサキニガナの花が目につく。タンポポの花を小さくしたような形だった。その他の生育していた植物は，ニガクサ，キンミズヒキ，ウマノミツバ，タケニグサ，シャガ，バクチノキ，キツネカズラ，コバンモチ，ハスノハカズラ，タラノキ，クスドイゲ，キヅダシ，キチジョウソウ，イタドリなどだった。川ぞいに，タケニグサが高さ2メートルくらいに伸び上の方には小さな花をいっぱいつけていた。おもしろい木としては，バクチノキだった。自分のからだの樹皮を脱いでいく木である。ここでウラギンシジミをつかまえた。そして，帰る支度をはじめた。車を走らせていくと石垣のあちこちに，カノコユリの花が咲いていた。それをすぎると道の両側が山に囲まれたところに来た。阿母峠というところだった。両側の高いがけのような山が，車にせまってくる感じだった。道の幅は2メートルぐらいだった。先生方が，前にここへこられたときには，たくさんの収穫があったということで，車から降りて，歩いて通ることにした。歩いても，珍しい花も見つけられなかった。季節が夏だけに青葉の茂る草木だけだった。その青葉の中に古くなった板に何か記されているのを見つけた。『シダ植物群生地，3万年前から生育』ということばが目にはいってきた。驚いて，まわりを見まわすと，なんと大きなシダの多いこと！ そばには20～50センチくらいのアケボノソウが数本みつかった。まだ花はついていない。車を少し走らせて，先生方が前みつけたことのあるテイカカヅラ，シリブカガシをさがした。が，見つかったのは，シリブカガシだけで，その代わりに，マルバキブシとかカギカヅラも見つかった。阿母峠を越えて，市比野にたどり，市比野川にそって帰った。それからムクゲの八重咲きが畑の両側に植えられているところを通り，桑木野というところへ出た。

帰りは田代を通り国道3号線に出て東市来を通って帰った。加世田にはいると阿多との堺のような所でにわか雨が降り出し急いで学校まで走った。

１９７４年8月１０日～１２日

秋目調査会（第4回採集会）

1年　山　口　由美子

参加者：1年　東　直子　森　紀和子　森　三千子　新田元子　山口由美子
2年　物袋幸一郎　中島久之　鮎川愛子　石堂律子　内田よし子
3年　市来勝一郎　鉛山茂久　鮫島　泉　小窪博文
OB　木佐貫　彰　平山　智章　本坊徳光
顧問　佐方先生　山本先生

8月１０日

朝，加世田駅に集合し，バスに乗って大浦まで行った。そこから秋目まで9Kmもの距離を採集しながらてくてく歩いた。8月の暑い中，曲がりくねったじゃり道を歩くのはしんどかった。道のわきには，カラムシ，ヒメオトギリソウ，アキノタムラソウ，クズなどが見られる。また樹木では，クサギ，エゴノキ，ムラサキシキブ，アカメガシワ，クロガネモチなどがあり，あちこちの山に，センニンソウの白い花が見られた。

きれいな山水が流れている所で昼食にして少し休んでからまた歩き出す。秋目はまだまだ先である。途中，コオニユリのかわいい花を見つけて，根からほって持って行った。クロキ，タラ，クマノミズキ，シャリンバイ，イヌザンショウ，カラスザンショウ，ガマズミ，ハクサンボク，キブシなどは花あるいは実をつけている。

何時頃だったろうか，とうとう目的地秋目に到着したのだ。小学校跡の宿直室に寝泊りするために，休む間もなくそうじにかかった。やっと一息ついた頃に，有線放送か何かで「本日は小学校跡に加世田高校の生物部の皆さんがいらしております……。」とやっている。とてもいい気分だ。小学校の下はお寺なのだが，その横に樹齢何百年かという大きなアコウの木があった。そのそばには墓があって，いっそう不気味な気がした。

夕方，山本先生が釣りに行くというので炊飯をさぼって連れて行ってもらった。木佐貫さんもいっしょである。ものすごく急ながけを下りなければならなかったので山本先生は私を連れてこなければよかったなどとボヤいている。私は聞いて聞かぬふりをしていた。

海は青く澄んでいてとてもきれいだった。つりざおにエサをつけて投げてまもなく雨が降ってきた。夕立ちである。仕方なく帰ることにした。体中ずぶぬれになってさんざんだった。炊飯をさぼった罰だったのだろうか。

楽しい夕食が終わると，歌を歌ったり，話をしたり，トランプをしたりしてすごした。何時になっても眠られず，何度か叱られた。こうして楽しい1日目は終わった。

8月11日

2日目を迎えた。水が出なくて大変困った。洗顔も炊飯もできないのだから。やむを得ずお寺までバケツを持って行って水をもらって無事朝食をすませた。弁当を持って9時50分に出発。目的地は黒瀬である。山はだに大きなソテツがある。自生したものらしい。クズが土手の他の植物をおおっている。こういう植物をマント植物というそうである。カワラケツメイや，ハマナタマメ，メドハギ，ナツフジ，ミヤコグサ，キンミズヒキ，いずれも花が咲いている。樹木では，カラスザンショウ，モクタチバナ，ヌルデ，ハクサンボク，コバンモチ，クマノミズキ，ムクエノキといったものが目につく。他にハチジョウススキ，アオノクマタケラン，ヒルガオ（かわいい花が咲いていた）ハマセンダンなども見られた。

11時半，唐浦（もろこし）という所で休けいして水を飲んだ。唐浦をすぎて少し行った所が後藤である。後藤付近で昼食にした。腹ごなしをして元気が出たところでまた歩き出す。アカメガシワ，ハドノキ，ヒヨドリジョウゴ，ハダカホオズキ，ホウキギク，ホルトノキ，ハマヒサカキなどが見られる。また，ハマヒサカキにヒノキバヤドリギが寄生しているのを見つけた。

2時40分，黒瀬がよく見える所で休んだ。はるか向こうに黒瀬を見て話をしていたが，もうだれ1人として黒瀬まで行く元気はないらしく，引き帰すことになった。1年生は地学の宿題で岩石を10種類以上集めなければならなかったので，帰りは山本先生が取って下さった。宿題を出した本人が生徒のために岩石を探しているとは，全くおかしい話ではあるが，私たちはゴキゲンだった。頭を痛めていた宿題が1つ終わったのだから。

秋目に帰り着いたのは4時半だった。近くの店でかき氷を食べて海に行って，それから小学校に帰った。夕食が終わるとテープを流して，庭でフォークダンスが始まった。明日までだと思うとものの足りない気がした。歩きまわって疲れていたのですぐ眠れた。

8月12日

最後の日である。朝食がすむと，かたずけは他の人にまかせて佐方先生と植物班は最後の採集に出かけた。ダンチク，イヌホオズキ，センダングサ，アメリカセンダングサ，ヘクソカズラ，ヤブランなどを採集した。

9時50分　みこし川付近で水を飲んだ。ひとりのおじさんにパッションフルーツ（とけいそうの実）をいただいて食べた。見るのも食べるのも生まれて初めてであるが甘ずっぱくておいしかった。おじさんにいろいろなお話をうかがって別れた。

センニンソウ，オトギリソウ，サツマサンキライ，ハマビワ，ジャケツイバラ，タカサブロウ，ゲンノショウコ，マルバウツギ，ヒキオコシ，シロダモ，その他たくさん採集して10時40分引き返した。

帰ってから，お寺の和尚さんに庭の植物についていろいろな話をうかがった。庭には，アオイゴケ，モンステラ，ベゴニヤ，セツカラン（梅の木によくつくそうである），タイサンボク，ヤコウボク，ブーゲンビリア，エビネランといった植物があった。

宿直室のそうじをして，お寺横のアコウの下で写真を写して大浦まで歩いて帰った。途中会った

おばさんにまたパッションフルーツをいただいた。

こうして楽しい3日間はすぎた。楽しくすごすことができたのも，水を分けてくださった和尚さんや，魚をいただいた宮内さん，それからパッションフルーツをくださった名前も知らないおじさんやおばさん，その他の人達が親切にしてくださったからだということを忘れてはならないと思う。

ツマベニチョウを求めて

2年　物袋　幸一郎

我校のチョウ屋にとってツマベニチョウは大きな目標であった。過去我校の蝶屋たちの最高の採集地である秋目に例にもれず小生も参上した。

この蝶は僕が知る限り最高に速く採集はむつかしいが，唯一の手がかりは幸にも蝶道がはっきりしているということであった。

草をかきわけ木佐貫さんの指示に従い草むらで待機した。（この時蚊にくわれあちこちかいてばかりいた）すると山の上から端の赤い大きな白い蝶が下りてきた「ツマベニチョウだ！」最初見た時は何か感動のようなものをおぼえた。だが1m前はガケで，こっちに来るよう祈る以外仕方がなかった。やはりここは蝶道であった。“しめた”と思いわくわく待っていると，アミのとどく範囲の1mぐらい先をひらひらと優雅に飛んでいかれた。それから何頭かおりてはきたのだがいずれも失敗。とろうと無理して草むらを走り回っていると突然2.5mのコンクリートのみぞにドスンと落ちこんでしまった。奇蹟的にかすり傷程度ですんだのだが大変な目に合うところだった。（過去我校の蝶屋の先輩方もよく穴に落ちこまれたようである）

山水を飲みながら虫ささされにもたえ，手をかえ場所をかえして粘ったのだがどうしても採れず，とうとう幼虫採集のためギョボクをさがしはじめた。さすがにギョボクはたくさんあったが幼虫のついていないのばかりで，よくメスのおり立つ木は谷のむこうで採集は不可能だった。

時間が来たのでひきあげたのだが“やっぱり5，6月ごろでしかも来た始めすぐにとらんとだめやネェー”などとぼやきながらキャンプ地に帰った。

１９７４年9月２２日（SUN）

内之浦町辺塚の巻（第５回採集会）

1年　　山　口　由美子

日時：１９７４年9月２２日
参加者：物袋幸一郎　中島久之　山口由美子　佐方先生　山本先生

朝は曇っていた。７時４０分頃加世田を山本先生の運転する車で出発。９時少しすぎに山川港に着いた。それまで，車の中から気がついた植物をあげると，ヌルデ，ハドノキ，ボタンボウフウ，ハゼ，クズ，ヒガンバナなどである。中でも印象に残ったのはヒガンバナで，色もふつうにある赤，それから朱色，白とさまざまで，墓にあげてあるところが多かった。この付近ではヒガンバナを栽培してあるところもあるという。

港には９時すぎに着いたものの，フェリーは満員で次のフェリーまで待つはめになってしまった。この時は小雨が降っていて採集ができるかどうかあやぶまれた。

１０時２０分　フェリーに乗った。出港したのが３３分で１１時１５分には根占港に着いた。それから１５分後の１１時３０分，田代へ向かった。車の中からわかった範囲で，ノダケ，ゴンズイ，フジウツギ，メドハギ，ゲンノショウコ，ミヤコグサ，カワラケツメイ，イタドリ[1]などがあった。ついでながら書いておくと，キチョウ，クロアゲハ，アゲハチョウ，タテハチョウ，ジャコウアゲハ，アオスジアゲハなど蝶をたくさん見かけた。

１１時５５分　車を下りて採集。アザミ，アカバナ，ボントクタデ，ミズヒキ，フジウツギ，イスノキ，コウゾリナ，ナンバンギセルなどを採集した。

１２時０５分出発。ヒメノボタン，アカメガシワ，コバンモチ，ナンバンキブシ，ゴンズイなどが見られる。コミスジチョウを見かけたので急いで車から下りて追いかけたが逃がしてしまった。１２時１２分下車。ダンドボロギク，ベニバナボロギク，シロダモなどを採集してまた出発する（１２時２５分）。しばらく行くとどういうわけか行き止まりになっている。しかたがないのでUターンした。田代の店で道を教えてくれた女の人をうらんだりしたがしかたがない。途中で会った単車のおじさんが案内してくださった。県道に出た。おかしなことにさっきの行き止まりの道の号数と同じである。

１２時４４分　赤瀬川を通過，シオン，オミナエシ，ガマズミ，テイカカズラ，シラヤマギク，ダンチク，フカノキなどが見られる。

１時３０分　海が見えた。太平洋である。雄大でとてもすばらしい。蝶はウラギンシジミ，モンキアゲハ，コジャノメなどが飛んでいた。

２時１０分　辺塚に着いた。２時３０分に砂浜で昼食にした。ずいぶん遅い昼食だった。海は少し荒れていて，波が高く，しぶきが飛んでくる。色は青というよりは緑に近く神秘的だった。砂は

ふつうの砂ではなくて直径２ミリぐらいの小さい石の粒が集まっているような感じだった。何もかもが今まで見た海と違っていて，太平洋はやっぱりいいと思った。浜辺では牛を離し飼いにしていた。

昼食が終わると，採集を始めた。ツルボ，ゲンノショウコ，ヤマゴボウ，トベラ，オオイタビ，ハマビワ，マサキ，カラムシ，アコウ，ノカンゾウ，オオタニワタリ，ヘツカラン，セッコクランなどがあった。

採集したものを近くの店の河野さんに見せて，方言で何と呼んでいるかを教えていただいた，その一部をあげてみよう。

スニラ（ツルボ），カズラタビ（オオイタビ），スイベ（ハマビワ），イソジラ（マサキ），シロオイダ（カラムシ），ヤドカリノキ（アコウ），ボヨ（ノカンゾウ）

部落のこともいろいろ教えてくださった。戸数は２７～２８戸で昔は自家発電だったそうである。水は山から何軒かで引いており，エンドウやポンカン作りをしているという。ヒガンバナを栽培している家もあるそうだ。苗字は舟迫が最も多いそうである。

河野さんにお礼を言って３時３０分辺塚を発った。ルリタテハを取り逃して，物袋さんがくやしがった。マテバシイにオオバヤドリギが寄生しているのが目についた。また，カラスザンショウがたくさんあった。近道にしたのはよいのだが，曲がりくねったガタガタ道でつらかった。

田代でフェリーの時間を電話で聞いて，根占港へ向かった。ほとんど車の中だったのでとても疲れたけれど，辺塚という所は私に鮮明な印象を与えた。またいつの日か，あの海を見に行きたいと，そう思っている。

１９７４年１１月２４日（SUN）

大坂コース（第６回採集会）

１年　森　三千子

参加者　顧問　佐方先生　山本先生
　　２年　物袋幸一郎　神野直也　中島久之　鮎川愛子　田代洋子
　　１年　新田元子　安楽頼子　森三千子

コース　加世田駅発（８：３０）－＜バス＞大坂（９：０５）－梅ノ木（１０：０５）－大平（１１：１５）－悪谷（１２：００）－田平（１：３５）－笹連小学校（１：５２）－土卒（３：２０）－浦之名（４：０９）－加世田着（４：３０）

日頃の活動にもかかわらず，少しはだ寒い感じがしたが，採集会にはもってこいの天気であった。今年最後の採集会だというのに，先生を参めて１０名。８：３０　加世田発のバスにのりこみ，大坂めざして出発進行。バスの中では，準備ができてないといって大さわぎである。

３５分後，大坂で下車。

私は植物班。佐方先生のあとについて，さっそくメモ帳に植物名の記入をはじめる。

最初に目についたのは，マーガレットの花を小さくしたような白いかわいらしい花を咲かせているヤマシロギクである。荒涼とした枯野の中に，ひっそりと咲いているこの花，とても象徴的だった。ヤマハッカ，コアカザ，イヌビワ，サネカズラ，クサギ，みんなそれぞれ実をつけている。私は，クサギにだけは，おぼえがあった。というのは，夏の秋目のキャンプのとき，さんざん佐方先生に言われて，やっとおぼえたのだから，夏には，白い花をいっぱい咲せていたが，今はピンクの実をつけている。しばらく行くと川が流れている。川の付近で，タニワタリ，タラヨウ，カタヒバ，シダ類のヒトツバ，ヤノネシダ，ナシカズラなどを採集。このナシカズラの実がじゅくすと，あずきに似た味がして大変おいしい。そろそろ銅乱の中がいっぱいになり，肩が少し痛くなりはじめた。それでも，ひたすら採集をつづける。秋の七草のひとつであるリンドウ，ノビルに良く似ているヤマラッキョウを採集した。梅ノ木でビワの花が咲いているのを見かけた。この時季では，ちょっとはやすぎるのではないかなどと思っていたら，うすむらさきの，なんかシクラメンの花を思わせるような植物に出会った。先生にたずねてみると，いともあっさり，「これはナンバンキセルだ，ススキに寄生するんだ」とおしえてくださった。そうこうするうちにランチタイム，刈り入れの終った麦畑のふちに腰をおろし，弁当をひろげる，弁当を忘れて来た部長さんが，さかんにみんなのお弁当をつついてまわった，昼食後又，再び採集をはじめる。ミツバツツジ，ボロボロノキ，シラヤマギクなど採集，途中シイタケの栽培がしているところをみかけた。ところで，季節は秋。くいけさかんな我々は，治道にある柿の木が気になってしかたがない。真赤に熟した柿の実が枝にいっぱいついている。この柿，全部甘柿にみえる。がしかし実はしぶ柿ばっかり。今度こそはと望みをかけてかじるのだが，全部しぶ柿。舌はおかしくなりどうしても，甘い柿が食べたくなり，部長さんに「柿を食べたい，柿を食べたい」と訴えたりすると，そこはやさしい部長さん，どこからか甘い柿をみつけてきてくれて食べさせてくれた。

１９７４年１２月２１日（SAT）

田ノ頭（第７回採集会）

1年　姥　　まり

伊作峠を越えて行った。冬の峠は，松や杉の緑の中にアオモジの黄葉が目を引いた。左の細い道にはいってから少しいくと２本の道があって細い方の道を選んだ。自動車が通れるくらいの道をゆっくりくだっていくといろいろな植物が，窓から見えた。一番多かったのが白いヤマシロギクだったが冬の冷たい風に耐えかねたように小さく枯れそうになっていた。それに赤いハクサンボクの実が，木々の中からのぞいていた。さらにくだると杉の林の暗いところについた。ドアをあけたとたんに冷気が，からだ中にしみこんだ。冷水が暗い林の中を通って流れている。イワガネソウ，マツザカシダ，クリハラン，オオキジノオ，オオバノハチジョウシダなどが群生しているためらしい。道のがけわきには，ニワトコ，トウゲヒバ，ミズスギ，ミヤマウズラなどの湿気の多いところに育つ植物の上の方には，ヤブタバコ，タラヨウが，手をさしのべていた。フユイチゴのかわいい実が道路わきにねそべっていた。その他には，マルバウツギ，ヤマアイなどがあった。それから車からオドリコソウの白淡紅色の花と，背の高い裸の木を見上げるとヒョウタン形のナシが多数実をつけていた。赤い丸い実のサルトリイバラを採って進むとこんどは，コマユミにも小さい赤い実がついていた。やがて２，３軒ずつ家がみえてきた。それと同じに道路のそばの畑に移植された野菜らしいものがみえて珍らしかった。ダイコンの葉のようで，それよりもやわらかくみえた。近くのおじさんは，「センボンナ」と教えてくれた。

次は「田ノ頭」という所で，わらぶき屋根の家をみつけた。道を左にいくとバス道路にでた。車は坂をくだり左側に永吉川の県営防災ダム建設現場を見おろしながら走りつづけ坊野でとまった。右側に見える黒川洞穴への上り坂までくると二基の仁王石像が道を挟んで立っている。享保１７年４月吉日に浜田宇兵衛が敬供？とかすかに判読できる。洞穴内には，権現の祠があり，つばきなどの花が飾られていた。洞穴の前に大きなコジイの老木が並び立ちうす暗く，洞穴のわきのこけむす大岩壁と共に千古の神秘をひめているようだ。それもそのはず，ここの洞穴は終戦後４回の発掘調査の結果約３０００年前（縄文前期）から２３００年前（弥生前期）まで７００年間の先住民住居の跡と推定され，昭和４０年１月に，考古学上の重要文化財として指定された所なのである。妖気漂う重苦しい感じから明るみの現世へ戻る途中地上数センチのツルコウジのかわいい真紅の実が二つ三ついまにもころがり落ちそうにのぞいていたのには救われた気持ちさえした。再び車を走らせ下田代野の数個の安山岩採石場を見，田尻にはいると大エノキの裸の枝にヤドリギの団子状のかたまりが見えた。県道２７０号線に出て一気に加世田まで。帰着４：３０

１９７５年２月１１日

坊津町車岳周辺（第８回採集会）

１年　　山　口　由美子

参加者：鮎川愛子　南　敬子　山口由美子　佐方先生　山本先生　吉峰悦子

春の初めの穏やかな日だった。私は新田商店の所でみんなといっしょになり，事務の吉峰さんの車に乗って出発した。９時２７分のことである。本格的な春にはまだ遠いが，畑には菜の花がチラホラと咲いていた。

９時５０分頃であったろうか，坊津町にはいった。あちこちの畑でエンドウ栽培をしている。それから５分ぐらいしてから海が見えた。海はいつ見てもいいものだ。まっすぐ進んで行くと，道路が工事中でUターンしなければならなかった。しばらくして車を降りた。車岳のふもとである。しばらくは，エビ，カキなどの養殖をしてある海や，向こうの野間岳や今岳を眺めていた。今朝は割合にポカポカしていたのに，まだ山は風がつめたい。もっと着こんでくればよかったなどと悔やんだ。海をバックに写真を撮ってから，採集にかかった。

サツマイナモリ，コンテリギ，クロキ，ツルソバ，コナスビ，ハクサンボクなどは花が咲いている。また，ヤツデ，ハダカホオズキ，ノシランなどは実があり，タブ，ナシカズラなどは芽をつけており，春を感じさせる。その他，ハドノキ，フウトウカズラ，シロダモ，アラカシ，ヤマビワ，ハクサンボク，トベラ，サザンカ，ホルトノキ，シイ，シャリンバイ，カラスザンショウなどが見られる。これらの樹木のあらゆる所に，ケムシがたくさんついていた。・カラスザンショウは裸地に生えていて，みんな１ｍ内外であった。ヤクシソウ，ダンドボロギク，オトコエシ，オオアレチノギク，カラスノゴマなどは枯れている。フカノキが１株だけあった。フカノキは珍らしいものだそうである。またヒノキバヤドリギが，ネズミモチに寄生しているものが一ケ所あった。

１２時３０分，昼食にした。寒いけれど，高く，見はらしのいい所で食べる弁当の味は何とも言えない。少し休憩して１時すぎからまた採集を始めた。

ツキヌキオトギリがあった。オトギリソウとかヒメオトギリは知っていたが，これを見るのは初めてだった。ササキビが一ケ所だけあった。アカメガシワ，キブシ，ムラサキシキブ，クサギ，モッコク，バクチノキ，モクタチバナ，イタビカズラ，ヤマビワ，ハマビワなどが見られた。

とても寒かったが，いろいろな植物を採集し，まためずらしい植物も見て勉強になった。今度は海がきれいな頃 ― 夏に採集に来たいと思う。

本校のシンボルあふち（センダン）の大木にまつわる話題

1年　安楽頼子

1. 樹下に落ちていたウマオイ？

１９７４年１１月２日土曜日の始業前に加世田高校の中庭にあるセンダンノキの下に，クツワムシ類で，しっぽの出たもの３０匹，ないもの２１匹が落ちていた。体長は３～3.5㎝，体色は淡い緑色だった。

なぜ，この日，センダンノキの下にこの虫が落ちていたのだろうか？

この日は，いつもより相当気温が下がっていた。そのせいだろうか？

とにかく，生きているものを飼育してみた。まず，飼育箱に，砂と土をふるいにかけて１：２の割合で$\frac{1}{3}$～$\frac{2}{5}$まで入れ，センダンの葉を食べるのではないかという予想をたて，試しに２，３本の小枝を入れた。

次の日に，この虫は，センダンの葉をよく食べることがわかった。そして，しっぽの出ているものは，土の中に産卵をする時のものらしいからめすにちがいないということになった。去年の話になるけれど，加世田高校の近くにある加世田中学校の自転車置場の横にもセンダンノキがあって，冬によく，同じ虫が落ちていたということを聞いた。寒い日に限ったということなので，寒さで落ちたということがいえる。けれど，加高の場合は，傷ついていた。なぜだろうか？

数日たって，この虫は，きゅうりもよく食べることがわかった。毎日，センダンの葉のとりかえをやったにもかかわらず，１１月１５日には４匹が死んでしまって生きているものは１７匹になった。この虫は弱そうなのに，５～６日何も食べなかったものが生きていたりもして，この虫について全くわからなくなってしまった。

２週間後の１１月１６日にはこの虫の飼育箱の土の上にかびが一面はえていたので最初入れた時同様にして入れかえた。それから毎日，センダンの葉を入れかえてやったが，平均して２～３匹が死につづけた。しっぽの出たものが，白い卵のようなものをつけていたり，しっぽを土中に入れているのも見かけたので，やっぱりしっぽの出たものがめすだということがわかった。

その後，毎日２～３匹ずつ死んで行き，１２月１６日には，全部死んでしまった。この虫については，わからないことだらけだったが，来年，卵を生みつけてある飼育箱から二世が誕生することを期待して，報告を終わります。

2. 樹上に巣喰うアオバズク（フクロウ）

１９７４年６月初め，センダンの木の下に首や胴のない昆虫何種類かの無残な死骸が散乱しているのを発見した。その頃誰からとなくフクロウがいると言い出した。ある日のこと，中庭に出てみると，センダンの木の下に何人かの人が集まって上を見あげていた。何ごとだろうと思って同じよ

うに上を見上げると，木の枝にフクロウがいるのがわかった。どうやら巣があるらしい。その後はセンダンの下を通るたびに上を見上げるようになった。

6月16日，いつものように見上げると，フクロウのひながいるのがわかった。2羽である。

6月20日，フクロウのひなが20mぐらい離れた所にあるネムノキの枝に止まっていた。双眼鏡でのぞいてみるとまんまるの目をしてとてもかわいかった。

そのフクロウもいつのまにか見えなくなった。ひながだいぶん飛べるようになってからどこかへ飛んで行ってしまったのだろう。1973年にもやってきてセンダンの木に巣喰っていたそうである。またこの次もフクロウがやってくるのを楽しみにしている。その時は，2羽のひなもずいぶん大きくなっていることだろう。

3. センダンの実とヒヨドリ

まのせ2号に，ヒヨドリとあふちの話題で，福田先生が興味深い観察をしておられる。これはおよそ10年ぐらい前のことであり，今回また，センダンの実とヒヨドリについて調べることにした。

1月8日，学校に来てみると，センダンの木の下にたくさんの実がおちているのを発見した。この実については，センダンの実の他に別の種類（クス，クロガネモチ，ハゼなど）の実などがあった。ヒヨドリやツグミなどが，冬休みの10日間に，人気のない校庭にやって来て，安心して，センダンの実を食べて落としていったものらしい。

センダンの実については，正確な数は，わからないが1平方メートル当り500～600ほどが落ちていたので，枝下の表面積（半径約9メートル）から，127000～152400個位と思われる。落ちていた果実や種子の種類は不明なものも数種あったが，ハゼの種子は，神野直哉君の調べで判明した。（この調査は，樹下任意に定めた4区域について行なわれたが，惜しいことにその成績数字が失われてしまったので上の不明確な記事で終ったのは残念である。）

文化祭展示植物　　1974年10月15日

2年　馬込一恵・西園由加里　　1年　山口由美子

文化祭（１０月１５日）に展示した植物の種類を五十音順に並べてみた。（　）内には簡単な説明や，１１月７日に調べた発根の有無を○×で書き加えた。

アオツツラフジ（紫黒実，普通，×）　アカツメクサ（淡紅花，シロツメクサより少ない，○）　アカバナ（長果多し，湿地に稍普通，×）　アキグミ（普通，満枝小球果あり，夏緑，×）　アキノキリンソウ（山地所々，×）　アシボソ（湿地に群生，×）　アブラススキ（山足陽地生　×）　アメリカセンダングサ（人里付近に帰化　×）　イヌコウジュ（普通　×）　イノコヅチ（普通，この外，多毛のヒナタイノコヅチもある。ヤナギイノコヅチは稀　×）　エビヅル（紫黒果，葉裏綿毛　×）　エノキグサ（陽地に普通　×）　オオバコ（普通，時折ヤグラオオバコもある　○）　オオバショウマ（山地に稀　×）　オガルカヤ（普通，アオオガルカヤもある。メガルカヤは少ない。メリケンガルカヤ逸出しつつある　×）　オギノツメ（湿地，水中にある　×）　オトコエシ（普通　花後の果序も眺めよい　×）　オトコヨモギ（普通　ヨモギより少ない　×）　オニガヤツリ（水田沼地に稍普通　×）　オヒシバ（路傍に普通　根強い　×）　オミナエシ（山野に稍普通　オトコエシより少ない　×）　カゼクサ（路傍に普通　×）　カナムグラ（雌雄異株　所によってはマント植物となる　×）　カタバミ（多い　ムラサキカタバミも人里付近に普通　×）　ガマズミ（赤い実が美しい，葉は有毛，果実は虫こぶになったものがある　×）　カモノハシ（やや普通　海岸にケカモノハシ群生　○）　ガンクビソウ（山地に普通　×）　キツネノマゴ（普通，白い花もある　○）　キンエノコロ（多い，エノコログサも普通　○）　キンミズヒキ（山野に普通　×）　クズ（普通，マント植物として顕著　×）　コケオトギリ（普通，オトギリソウより湿地に多い　○）　コシロネ（稀　×）　コナラ（普通　×）　コメヒシバ（普通，メヒシバも多い　×）　ゴンズイ（果柄紅色　普通　×）　シラヤマギク（普通　×）　シロバナサクラタデ（水田などに普通　宿根　×）　ススキ（多い　穂の色に変化あり，トキワススキは７月出穂大形　×）　セイタカアワダチソウ（帰化　所々に群生　×）　センニンソウ（普通　ツクシセンニンソウは稀　×）　タヌキアヤメ（ごく稀　湿地に群生　×）　ダンドボロギク（休耕田などに多い　×）　チカラシバ（路傍に普通　アオチカラシバはごく稀　×）　チョウジタデ（水田に普通　×）　ツユクサ（普通　毛の有無，花色の異品も稀にある　○）　ツルマメ（さや全面有毛　所々群生　×）　ツワブキ（普通　秋の山を黄花で飾る　花色異品もある　×）　トベラ（果皮３裂　紅色種子顕著　普通　×）　ナシカズラ（山地に弥普通　×）　ナワシログミ（普通　白花香りがいい　×）　ナンバンギセル（稍普通　ススキなどの根に寄生　×）　ヌカキビ（路傍湿地に多い　×）　ヌスビトハギ（やぶ地に普通　ミソナオシは山道に多く花期早い）　ネズミノオ（根が強い　×）　ノダケ（紫褐色花　普通　淡色花品種も稀にある　×）　ノブドウ（果は淡紫，青，白色が混ざる　ごく普通　×）　ハイキビ（水田湿地に普通　○）　ハクサンボク（山地に多い　紅果が美しい　×）　ハンゲショウ（湿地に普通　×）　ヒサカキ（普通　×）　ヒメクグ（湿地に普通　×）　ヒメム

カシヨモギ（荒れ畑に群生，オオアレチノギクも多い　×）　フユイチゴ（山地に普通　紅果　ホウロクイチゴも山地に普通　×）　フユヅタ（山地樹石に着生　ナツヅタも普通　×）　ヘクソカヅラ（原野に普通　×）　ベニバナボロギク（伐採地などに群生，ダンドボロギクより普通　○）　ホソアオゲイトウ（人里などに群生する帰化種　ホナガイヌビエも同じく帰化　×）　ホソバノアキノノゲシ（路傍に多い　×）　マルバウツギ（山地に多い　古果を永くつけている夏緑低木　×）　マルバツユクサ（ツユクサより稀　多毛小花　○）　マルバハギ（山野に多い　×）　ミズヒキ（普通　×）　ミゾソバ（水溝川岸等に群生，紅白の花　○）　ミツバアケビ（山地に普通　アケビ，ゴヨウアケビもありムベも見つかる　×）　メドハギ（草生地に多い　ハイメドハギもある　×）　ヤクシソウ（山地に普通　○）　ヤブマオ（やぶ，湿地に普通，ハガバヤブマオ，メヤブマオは少ない　×）　ヤマハッカ（山道に多い。淡紅花も稀にある。ヒキオコシは少ない　×）　ヤマヒヨドリ（山地に普通　×）　ヤマラッキョウ（普通　稀に白花種もある。ノビルは原野に普通，現在は葉のみ　×）　ヨメナ（路傍に多い　山地にヤマジノギク普通　×）　ヨモギ（路傍に普通　×）　ワレモコウ（陽地に稍稀　形，色に特徴のある花序　×）

（平鹿倉植物方言）　地頭所　ちどり

コガタシ（サザンカ）　ヘゴ（ウラジロ）　ギンデンカン（スイセン）　ハイマケ（ハゼノキ）　ツバナ（チガヤ）　ツワンコ（ツワブキ）　ガラン（エブヅル）　コタッ（イヌビワ）　ボンバナ（オミナエシ）　アッペ（アケビ）　ナガシバナ（アジサイ）　カッタネ（ナタネ）　サカシバ（ヒサカキ）　ウンベ（ムベ）　インズロンハ（ユズリハ）　ガラッパグサ（ドクダミ）　ネコンシッポ（エノコログサ）　チョウセンザクラ（ヤエザクラ）　チョッバナ（ヒャクニチソウ）　ヨダレコボシ（ナンバンキセル）　ネムイコ（ネムノキ）　マンピロ（ジャノヒゲ）　ラッキョウバナ（ヤマスダレ）　ピィーピィーバナ（ヒメヒオウギズイセン）　キンノトイノシッポ（グラジオラス）　イセンミ（ハクサンボク）　ヘビゴンニャク（マムシグサ）　ヤマショウガ（ハナショウガ）　ヤマダケ（アオキ）　モガンコ（ミョウガ）　コガレシダ（ホラシノブ）　コンメゴンメ（マルバウツギ）　トコロ（ニガカシュウ）　ハナタッコン（ヤマノイモの実）　ヒネカズラ（サネカズラ）　カッカズラ（ツルコウゾ）　ネコンビ（カカツガユ）　ショイノピ（クスドイゲ）　タランピ（ミソッチョ）　シャシャンボ（クサイチゴ）　ハクリ（シュンラン）　ヤマビワ（ヤマビワ）　ノコギリンハ（タラヨウ）　トベラ（トベラ）　イボタ（ネズミモチ）　トンノッ（ヤマモガシ）　シタヘ（コバンモチ）　デクッサミ（ネズミモチの実）　カカランハ（サルトリイバラ）

園芸メモ（1974年4月～1975年3月）

1年　竹　迫　涼　一

〔4月〕

11日　除草，水かけ

12日　除草，水かけ，木札の設置

23日　ノビルの観察をするために鉢に植える（3本）

〔5月〕

16日　グラジオラスの球根植えつけ（31個）

25日　ヒナゲシ，チューリップ，ハナビシソウ，ヤグルマソウ，キンセンカ，マツヨイグサ，パンジー，デージー，レナンキュラス等の引き抜き，カンナの移植

28日　ひまわり，コスモス，百日草の苗植え

29日　苗植え　ひまわり，コスモス，百日草の移植，フランスギクの定植　アイリス，チューリップの球根採取

30日　苗植え

31日　ひまわり，コスモス，百日草の移植

〔6月〕

3日　移植　水かけ

4日　移植　水かけ，鉢の移動（温室→木の下）

5日　移植　水かけ

8日　移植　水かけ

〔8月〕

20日　ナタマメを植える（3本）

〔9月〕

17日　除草　水かけ

〔10月〕

17日　種まき

〔11月〕

2日　チューリップ，アネモネ，大水仙の球根の植えつけ

19日　温室のそうじ，鉢の移動（木の下→生物室）

昭和49年度生物日記より

1年　竹迫涼一

植物花ごよみ	動物採集観察記
4. 10　ハクサンボク満開	
12　ヒノキバヤドリギ発見	
13　ノイバラ満開（白亀山） イヌガラシの花が咲いている	4. 13　ジャコウアゲハ，ヒメウラナミジャノメ，サツマシジミ，ルリシジミ，ツマグロヒョウモンなど竹田神社にて目撃
16　ムラサキツユクサ開花 ハナビシソウ満開	
17　オドリコソウ，タツナミソウ，キュウリグサ，ハナイバナの花あり ナズナは実になっている	20　ワカバグモを竹田神社にて捕獲
22　シナアブラギリ，ニセアカシア満開	26　ショウカイモン夜飛んでくる
23　センダンにつぼみと新芽あり	27　ネムリタロウを新田，千河上で目撃 ヘイケホタル目撃
5. 13　ヒマワリの葉がだんだん大きくなってくる	
14　クスノキの花散り始める センダン，ガマズミ，キミガヨラン満開，カナメモチの花散り始める マキバブラシノキ開花 キョウチクトウ，アジサイつぼみ チシャノキ花あり，ムクノキ，ウメ青果あり	5. 16　ゴミグモ コガネグモ シロカネグモ を捕獲
18　桃花ブラシノキの花咲き始める	
20　ネズミモチ，クチナシ，ザクロ，ドクダミ，コモチマンネングサ，ビロウ，ショロの花咲き始める 赤花ブラシノキ満開 ギンモクセイの黒い実盛んに落ちる	
21　サツキ満開，ビヨウヤナギ黄花咲き始める（万世），ツクシバナの花咲く（内山田）	
22　ニワフジの紅花咲く	
24　大王松，枯葉の落ちたものがめだつ	

6.　8　ネムノキの花咲き始める
　13　クマノミズキ，アカメガシワの花が咲く
　16　ナタマメつぼみ
　20　ネムノキの果実長さ8cmぐらいのものが枝先に見える

7.　10　ソクズの花咲き始める
　14　ハマユウの花所々に咲く
　17　ナンテンの花が咲く
　18　ヒメヒオウギズイセンの花が咲く
　20　イヌホウズキの花が咲く
　21　トキワススキ穂あり
　　コオニユリ花あり
　27　ネジバナ花あり

8.　30　イチョウの実たくさん落ちている
　31　セキショウモ花あり（雄花，雌花とも）

9.　6　シロバナマンジュシャゲ咲きはじめ（万世）
　7　キツネノマゴ花あり（川堤防）
　10　タマスダレの花多い
　14　ヒガンバナ開花
　　ヒメノボタン花あり
　19　マメアサガオ，ノアサガオの花あり（川堤防）

9.　20　クロガネモチ果実色づく（講堂前）

6.　3　アジチグモ捕獲
　4　ゴミグモ，コガネグモ，ヌサオニグモ，チュウガタシロカネグモ捕獲
　16　センダンの木にアオバズクのひな2羽が見えた
　17　ネズミの赤ちゃん発見される（6匹　生物準備室）
　20　アオバズクのひな，センダンからネムノキの枝に移っていた
　22　アオダイショウの解剖
　23　アブラゼミ鳴く（PM1：00）
　25　川堤防のカンナの葉に小型のカタツムリたくさんつく

8.　14　アオバセセリの幼虫死ぬ
　21　キクヒムシ捕獲

9.　14　プラナリア採集（干河）
　15　センダンの木にキツツキがいた（校内）

25	ホソバヒイラギナンテン花あり	
27	モクセイ開花	
	キュウシュウセンニンソウ終花，未熟な果実あり	
10. 3	ツルソバ，チカラシバ，ヌカキビサヤヌカグサの花が咲く	
	シロバナキツネノマゴ花あり（川堤防）	
5	シキミの狂い咲き（校内）	10. 9 モンシロチョウさなぎになる(1)
		11 モンシロチョウさなぎになる(1)
		12 モンシロチョウさなぎになる(1)
		11. 2 クツワムシ，センダンの木の下に落ちていた。（51匹，♂21匹，♀30匹）
		カミキリムシ科の幼虫3匹を飼育
11. 12	ドウダンツツジ紅葉	
18	センダンの実落ち始める	20 クツワムシ2匹死ぬ
22	センダンの葉ほとんど落ちる	
27	ヤッコソウ見つかる（吹上）	28 ジョウビイキ（小鳥）を目撃
	イチョウの葉，全部落葉	12. 9 センダンの木にヒヨドリ6羽発見
		13 ケヤキの幹でアブラムシ捕獲

屋久島植物方言聞書

佐方敏男・山本英司

島の植物 ― 屋久島の植物は，古くより注意されていたが，明治以来は植物学的採集や調査がしばしば行なわれた。その結果現在では凡そ１２００種類が明らかにされた。初島氏によればここを分布の北限とするもの２７種に対し，九州本土よりの南限植物が２２１種ばかりもあって本島が九州南端からの続きの地であることが肯定できる。しかも一方独立の小島として５４種類（内１２変種を含む）にものぼる固有種類が検出されていることは興味が深い。

植物方言名 ― 「鬼ヘゴ　薩摩ノ西ノ遠島サダト云処又ヤクノ島ト云処ニ多クアリト云……葉ノ形シダニ似タリ薩摩ノ俗シダヲヘゴト云シダニ似テ大ナル故名ツク……」この記事は，大和本草（１７０９年版貝原益軒著）巻１２の終りに出ている。本夏（１９７５）われわれは，島の北東宮之浦の山道で群生するウラジロの方言をきいてみた。「シダと云って正月に使います。薩摩本土から山仕事に来ている人達はこれをヘゴと云っていますがどうもおかしいですね。」こう答えてくれる武元さんはいかにも腑におちぬといった面持である。それもその筈この付近には，本物のヘゴ（和名）があって土地の人はこれをヘゴと呼んでいるからである。それはともかくウラジロをここではシダ（時にコシダと区別してオオシダと云う）と云っていることは，方言周圏論が思い出されて真に興味あることといわねばなるまい。古名シダはウラジロを指すからである。

以下島で聞き得た植物方言名を五十音順に列記し（　）内に和名を入れ，つぎに地名の頭字を付した。聞きとりにくかった発音も多かったので誤記もあろうし，また時間の都合で聞きもらしもあったので，今後再三調査採録を続けて完全を期したいと思っている。数多くの質問に答えてくださった宮之浦の武元鉄蔵さん，栗生の月野多賀雄さんその他のかたがたに深謝する。なお末尾に参考のため内藤喬氏採録の方言名若干を「鹿児島県植物方言集」より抄出付記した。併せて謝意を表したい。　地名略 ― 宮（宮之浦）栗（栗生）一（一湊）尾（尾之間）楠（楠川）湯（湯泊）

㋐カタン（サルスベリ？）栗　アマギ（ギョボク）栗　アカユリ（コオニユリ）栗
㋑ヌガネブ（ノブドウ）栗　イモメ（ツルソバ）栗　イッサキ（ヌヨウ？）一
イロハンノキ，インロハ（ユズリハ）一，尾　㋒マイチゴ（ハドノキ）宮　㋓ンピツバナ（タマスダレ）一　㋔オカゼグサ（ササキビ）宮　オオシダ（ウラジロ）宮　オコバナ（ツワ）一
㋕エビ（エビズル）一　ガイブ（エビズル）尾　カキサンネン（ツユクサ）栗　カシワノキ（アカメガシワ）宮，栗　カラスズイカ（オオカラスウリ）宮　カワザクラ（サクラツツジ）宮　ガンセツ（ガジュツ）栗（栽培）　カイチゴ（クワ）尾　ガネブ（エビズル）栗
㋖リシンボ（グラジオラス）栗（栽）　キンキンハ（スイカズラ）一　㋗サギ（クサギ）宮
クサチョンギ（クサギ）一　クイタビ（イヌビワ）宮　クゥクゥラ（サルトリイバラ）宮
クソタブ（タブノキ？）栗　クロボ（クロキ）栗，湯　クロガキ（トキワガキ）栗

㋕サンキ（ハマヒサカキ）一　ケダンキ（ハマヒサカキ）栗　㋖ケコッコ（ツユクサ）一
コウノキ（シキミ）湯　コットウブ（タマシダ）栗　コッポー（ナシカズラ）宮
コシダ（コシダ）宮　㋗ンザンカ（サンダンカ）栗　サンタブ（タブノキ）栗　サンネン
シビキ（アザミ類）一　㋘キットバナ（シキミ）一　シオモンメ（ツルソバ）一
シキビ（シキミ）栗　シダ（ウラジロ）宮　ジュクリンカンザシ（メヒルギ）栗
シラーキ（バリバリノキ？）栗　㋙ーレイチゴ（ホウロクイチゴ）宮　㋚ラノキ（タラノキ）
宮　タブ（イヌビワ）栗　ダシノキ（ゴンズイ）栗　ダチク，ダック（ダンチク）栗
ダレッバ（ダンチク）一　タンネカズラ（クズ）栗　㋛ンノコ（エノコログサ）栗　チョウチ
ョバナ（グラジオラス）栗　㋜ビウオンハナ（ヒメヒオウギズイセン）宮　㋝ギク（サツマノ
ギク）栗　㋞カギ（フカノキ）栗　バイノハ（クワズイモ）宮　バンノハ，バーシ（クワズイ
モ）一，栗　ハマナ（ホソバワダン）栗　ハゼノキ（ヌルデ）栗　ハチマキ，ハチマケ（ハゼ
ノキ）一，栗　パチパチ，ハマガシ（ウバメガシ）栗　ハンソ，ハンス（ノカンゾウ）栗，一
㋟ーピー（キキョウラン）宮　ヒッツキベッタイ（オナモミ）楠　㋠イガラ（ハマクサギ）栗
ヘコハチ（シャリンバイ）栗　ヘゴ（ヘゴ）宮　ヘビバナ（ナンバンギセル）一　ヘビバナ
（ノアサガオ）宮　㋡イノキ（アオモジ）一　ホエンノキ（アオモジ）宮　ホートノキ（フト
モモ）宮（野生化）　㋢ットバ（アオノクマタケラン）一　マテノキ（マテバシイ）栗
㋣ズユス（クマノミズキ）宮　ミンミングサ（ユキノシタ）栗　㋤カズラ（ノブドウ）宮
㋥ホンノキ（モッコク）一　㋦マガキ（トキワガキ）栗　ヤマケダ（ヒサカキ？）栗
ヤマガレブ（エビズル）宮　ヤマサンショウ（サンショウ）宮　ヤマダラノキ（カラスザンシ
ョウ）宮　㋧ウジキ（アオモジ）栗　ヨシ（ハイキビ）栗，永田　㋨レッバ（ダンチク）一
㋩ーソクノキ（クロガネモチ？）一

鹿児島県植物方名集（１９５５）より抄出の方言名：—

アカイチゴ（ヤクシマバライチゴ）宮　アシクレイチゴ（ナワシロイチゴ）宮　カシワイチゴ
（ホウロクイチゴ）安房　カワツツシ（サクラツツジ）屋　キイチゴ（クワノハイチゴ）宮
コウジグサ（シロヤマゼンマイ）宮　シオズル（ホウロクイチゴ）栗　セクハチ（シャリンバ
イ）尾　デモチ（ツチトリモチ）屋　バシガシワ（クワズイモ）宮　フクノキ（ウラジロエノ
キ）安房　ミズイチゴ（ヤナギイチゴ）屋　ヤンモチ（モチノキ）宮

上記方言名について若干の説明を加えて備考とする。

イモメ — 果実の形状がイオンメ（魚の眼）に似ているから。
イッサキ — 一般には，アオギリを指す。ここでは誤認かも知れない。
ウマイチゴ — 稍イチゴに似た小果があるが食べられない。葉は山羊がたべる。
オオカゼグサ — 葉にある横の折れ目（しわ）の数がその年に来襲する大風の回数を示す。
カキサンネン — 堀りとって垣根の上にのせておいても3年間も生きている枯れにくい草。
キリシンボ — キジの尾羽（しっぽ）のような花序。
クイタビ — タブに2種あって食べられる方は小果黒熟，食べられぬのは大果赤熟すると。

コケコッコ ― 花がニワトリの頭部に似ている。

コットウブ ― 地下の球芽をコブ（タマ）という。

タンネカズラ ― カンネカズラを訛ったと思われる。

ハチマケ ― ハチにさされた時のようにはれてかぶれるから。

パチパチ ― 正月の鬼火にこの枝葉を焚く時発する音を意味する。

ハゼノキ ― 立木の実物で念を押して確かめたが，月野さんは間違いないといい切った。

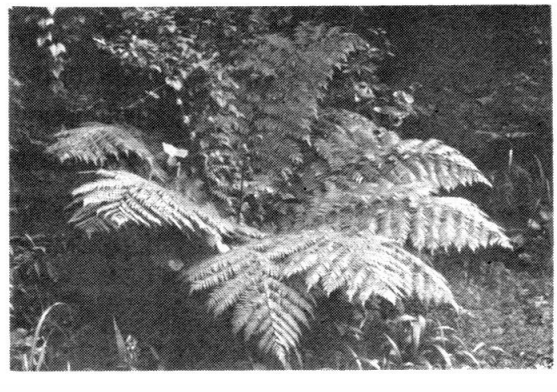
ヘビハナ ― ヘビがこの花を好むという（武元さん）。

マットバ ― いろいろ物を巻き包むからという。

ミズユス ― 水が多くて薪としては燃えにくいガンタレ（つまらぬ）木だという。

ヨシ ― はじめ永田の橋のたもとで2人の主婦にきいて疑問に思っていたが，栗生でも同じ答を得たのでやっと解けた。

① 野生のサル（宮之浦中流のアンチャン谷付近）
カコウ岩塊上のサルの左にカシワノキ（アカメガシワ）が風に吹かれている。下生にシダ（ウラジロ）らしい葉がのぞかれる。この島ではサル（去る）を忌みことばとしてアンチャンという由，アンチャン谷はサルの居る谷の意である。



② ヘゴの自生株（宮之浦に近い牛床自然公園内）
薩摩にてはタイワンヘゴまたはオオヘゴと云う。「大和本草」中の鬼ヘゴがこれである。

生物部名簿（１９７４年３月現在）

顧問　佐方敏男・山本英司

〔3　年〕

宮　原　康　展	加世田市武田１７７３４
奥　　真理子	日置郡金峰町宮崎２９２９
木　戸　真理子	加世田市本町７の４
東　　康　子	加世田市本町１７の１
南　　洋　子	加世田市村原２２８５
前　田　明　子	日置郡金峰町新山１６９１
弥　勒　菜穂子	日置郡金峰町宮崎３５４２
安　田　朱　美	日置郡金峰町宮崎３
唐仁原　俊　哉	川辺郡大浦町

〔2　年〕

鮫　島　　泉	加世田市小湊４０
市　来　勝一郎	加世田市武田１７８８４
牛　垣　祥　成	薩摩郡樋脇町塔牧原８６５８
鉛　山　茂　久	日置郡金峰町大坂５６４５
小　窪　洋　文	川辺郡大浦町柴内１１６２８

〔1　年〕

物　袋　幸一郎	加世田市川畑４１７７
神　野　直　哉	日置郡金峰町宮崎７６８
中　島　久　之	加世田市川畑２７５１
鮎　川　愛　子	加世田市武田６７４５の３
永　田　千　晴	加世田市川畑６９１９
内　田　よし子	加世田市村原４４４の１
上　舞　久美子	加世田市川畑４２１２
南　　敬　子	加世田市村原２２８５
石　堂　律　子	加世田市内山田坂口
田　代　洋　子	加世田市内山田１９２１６

馬込一恵	加世田市武田６２１４
西園由加里	加世田市武田４５６５
松窪啓子	加世田市川畑１６３

（１９７５年３月現在）

〔１　年〕

大迫豊広	川辺郡笠沙町赤生木１８４６
竹迫涼一	姫路市豊富町甲丘三丁目九四
姥　まり	川辺郡笠沙町赤生木７８８１
安楽頼子	加世田市津貫７９３１
東　直子	加世田市本町１７の１
新田元子	加世田市津貫３７０４
里園菊代	日置郡吹上町今田８６５３３
田宮淳子	日置郡吹上町中田尻１７７５３４
泊　美也子	日置郡金峰町大野３６２５
宮下菜穂子	日置郡金峰町尾下２１８４
山口由美子	加世田市津貫２１３７
森　紀和子	加世田市武田１５７７０
森　三千子	川辺郡坊津町坊５８０５

（２・３年生は，１９７４年度の１・２年生です。）

編　集　後　記

どうなることかと思った「まのせ」もやっと発行までこぎつけました。部員一同「バンザイ！」と叫びたい気持ちです。１１号の編集がおくれ，１２号の編集の時期と重なってしまい，四苦八苦してやっと書き上げたと思った矢先に思いがけないことで原稿の大半をなくして一時は茫然となりましたが，部員の努力により再編集してやっとでき上がったのがこの合併号です。

表紙絵は１１号がサソリモドキ（宮原康展君写生）で１２号がヤッコソウ（前田　太君写生）の予定でしたが，不幸中の幸いとでも申しましょうか，ヤッコソウの絵は残ったので，この合併号の表紙絵にすることになりました。

太郎木場や秋目のキャンプでの水の苦労や，蚊に悩まされたこと，海が美しかったことなどは楽しい思い出として，また生物部のマスコットであったラットの死は悲しい思い出として今でも心に残っています。

最後に，編集にあたり顧問の先生方及びその他のいろいろな方々に御協力をいただいたことに深く感謝しております。なお原稿一枚一枚が部員の汗と涙の結晶であり，皆一生懸命やってきましたが，発行がひじょうにおくれたことはほんとうに申し訳ないと思っております。

失われた原稿

１１号

- ネムノキにくるアゲハ蝶 …… 物袋幸一郎
- トウモロコシのキセニア観察（F_1のもどし交配）…… 神野直也
- 採集会の記録（八瀬尾，亀ケ丘，錫山，長屋山）
- 短　報
  - 赤潮（１９７３年４月１日小浦海岸で観察，鏡検の結果夜光虫）…… 唐仁原俊哉
  - ヤッコソウの自生地調査（吹上町伊作）…… 西園　馬込　石堂

１２号

- ナタマメの果実の成長 …… 東　直子
- チガヤの穂について …… 東　直子　森　紀和子
- 採集会（磯間山）…… 東　直子
- ＰＴＣによる味盲調査 …… 新田元子　安楽頼子
- 水草について
  - ミズオオバコの葉の変異 …… 竹宮一恵
  - ウキクサの繁殖調査 …… 田宮淳子　泊　美也子

１１号の予定表紙絵

サソリモドキ　Typopeltis　stimponi　(Wood)

節足動物門クモ形綱脚鬚　甲殻類。沖縄，台湾，中国にも産し，日本では奄美大島，とから列島，薩摩，大隅半島の南端，上こしき島，熊本の天草に分布し，天草の牛深は分布の北限地である。体長は４５㎜ぐらい。腹端に開口する肛門腺から強い酢酸臭の液を発射して敵を防ぐ。図は亀ケ丘で採集されたものを宮原康展君が写生したもの。その後１９７５年４月１日に車岳で，同年８月１０日太郎木場で１頭採集した。珍らしい種類である。

鹿児島県加世田高等学校生物部誌　まのせ　11・12号
発行日：　1976年4月1日
発行者：　鹿児島県加世田市川畑
　　加世田高校生物部
編集者：　森　　紀和子
印　刷：　鹿児島市城山町12－17
　　明るい窓社（TEL〔代〕24－5050）

プロセス化した新しい印刷
㈲明るい窓社
さいたま市城山町12-17
☎048-(852)5050